街函

西原　正

目次

月見草辻子
春の點
こうつと、こうつと
老眼鏡
火花
蝉の羽色
朝の匂いのする手紙
屋上
遠い鐘
芥子色
あいたい
鬼灯
石に融ける
 菫
冬の陽
南天
舞台
春宵
洗顔

月見草辻子

　大学からの帰り道、いつものように舗装路の下で勢いよく水の流れる音がする。たぶん昔は小さな川が流れていて、蓋をするように道ができたのだろう。古い寺と数軒の家に挟まれたこの道の突き当たりを直角に曲がって、人がやっとすれ違えるほどの細い路を少し行くと私の住んでいるアパートがある。アパートと、細い路を挟んだ向かいにある古いお寺の、五段ほどに組まれた石垣の隙間に月見草が生えている。一つや二つではない。ある石の周辺に集中的に生えているのである。
　昨年、花が咲くまでは雑草だと思っていた。花が咲いてからも日中はいつも萎れていたものだから、鮮やかな印象はまったくなかった。
　夏の夜、ぼんぼりのように浮かんでいる花の美しさ初めて気がついて、夜ごと見とれていたらば、隣家のお婆さんに月見草、と教えてもらったのだった。
　不思議に思えたのは生えている位置が人の背より高いところにあることだった。種もこぼれるだろうに道の隙間や他の場所にはまったく生えていない。その石垣の、ある石組みのところだけに生えるのだ。たぶん以前からここに生えていたのだろうけれど、それ以外の石の隙間には一つの雑草もなく、栽培しているようにさえ思えるのだった。
　ある日、帰宅すると、月見草の蕾がひろがりかけているのに気がついた。今夜咲くのだろう。

　隣の家の前には床机がだされ、おばあさんが座っていた。団扇でゆっくりと顔を扇いでいる。白いシャツと真っ白い髪が群青色の空気の中に浮かんで見えた。私は自転車を駐輪場に入れ、そのまま月見草を見に通りに出た。
　あたりはどんどん暗くなり花は微かに光を放つかのようにゆっくりと開いていく。ひとつ、ふたつ…花が次々と咲いていく。
「ああ咲きましたねえ。きれいやねえ」
　声の方へ向き直るとおばあさんが月見草を見ながら小さく頷いている。
「月見草はここだけで咲くんですね。毎年毎年ずっと同じところで咲くんですか」
　あんたはんはアパートに住まはって何年になりますの、と聞かれたので二年ですと答えた。どちらから、といわれるので東京、と答えた。それならご存じないんやね、とおばあさんは月見草の由来を語り出したのだった。

　このあたりはむかし「廓」がぎょうさんあったんです。「くるわ」ゆうてわからはりますか。ええ、そう遊廓です。このいったいがすべてそうやったんです。あなたの住んではるアパートも昔はそうやったんです。私が小さいころはまだ残ってましてねえ。ほらあそこのタイル張りの家、あれなんてそうどす。この石垣のあるお寺はもっともっと昔からありましてん。
　それでねえ、昔、お女郎さんにならはった人には、もう生きるか死ぬかの貧しいくらしをしていたお百姓さんの娘さんが大勢いはったんです。あなた年季明け、て知ったはりますか。年季明けゆうたら借金の返済が済んで自由になるいうことですねん。娘さんたちは借金のかたにもらわれてきたんです。ねえそんな貧しくてどないしてお金返せますか。返せるはずもない。みなさんくるわのなかで一生を終えていかはったんです。
　そんな娘さんの一人がここに来る時にお母さんから月見草の種をぎょうさん持たされてきはったそうな。この種を毎月ひとつぶひとつぶ身の回りにうずめておゆき、種が全部無くなった時に年季が明けるからゆうてねえ。そんなこと無理やいうのは、娘さんかてうすうすはわかっていたんやろけど、それでも母親の気持ちを大事にしようと、埋めていかはったんです。道端に埋めたりはせずにあの石垣のあの石組みのところに埋めていかはったん。

　おばあさんの細い腕がゆっくりと上げられ指が月見草をさした。

あそこがちょうどお手水の窓の外やったそうな。窓を開けた時その石垣の隙間を見つけたんやろね。種はいつか芽が吹くけれど、道に放ったんでは雑草みたいに引き抜かれてしまうかもしれないし、母親がどんな種をくれたんか知りたかったんやろねえ。それとも自分とふるさとをつなぐ最後のよすがは誰にも触らせたくなかったんやろか。母親はいったい何粒渡したものやら、その娘がどうなったかは話残ってへんの。

今、道になっているところが昔は廓だったんですねと聞いてみた。そう建物を壊して町内で辻子を通したという。
辻子ってなんです、と尋ねると細い腕を左右に振ってこの路ですという。路地だと思っていましたというと、簡単に言えば通り抜けられないのが「ろおじ」で通り抜けられるのが「ずし」なんだという。
もう一度、左腕が上がった。左を指し、すーっと線を引くように自分の家の前まで腕を回し、ここまでが路地やったんです。月見草の咲いている石垣の前を指し、あそこに廓があったんです、と言う。
廓の制度がなくなって、そこは廃屋になりましてん。で、そこさえ越えれば向こうの路地とくっついて便利になるからゆうてねえ。この突き当たりにコンビニがあるでしょう。あそこが昔は「マーケット」でそこが土地を買い取って辻子をを通したんです。お客さんを集めるのに都合がいいから。
ちょうど今頃でねえ。建物を壊したらあの石垣の、あの石から下までびっしりと滝のように月見草が生えていたんです。夜に花が咲いたら白くぼうっと浮かんで。花は黄色なんやけれど夜の中では、ほれあのとおり白く浮かぶんやねえ。気味が悪いゆうてほとんど抜かれたんやけれど、あそこは人夫さんも手をつけはらへんかったん。
それでこれはいったいどういうことやろうて、町内の人が前の廓のことを知ってる人に話を聞きに行ったら、そういう子がいたゆうてね。
お婆さんは息を継いだ。
その娘さんはどんな気持ちで種を石の隙間にいれていったんやろ。夜に咲く花を見てどんな気がしたのやろねえ。
それを町内で育て続けてきたんですかと尋ねると、ふふといって首を振る。一つの株が枯れても次から次から新しい株がでてくるんですとだけいう。
京都の街は碁盤の目だというけれど、現実には交差する大路、小路からさらに「路地」や「辻子」と呼ばれる細い路が毛細血管のように街の深部を走っている。私がこのアパートに決めたのは家賃が安いことが一番の理由だったけれど、ノスタルジックな下町の雰囲気が気に入ったからでもあった。まるで内側から脹らんでいるような木造モルタルの家、細かなタイルが壁にびっしりと貼られた家、縦格子の窓がいくつも並ぶ不思議な長く大きな家、仁丹マークのついた琺瑯びきの住所看板、迷路のような細かい路、路…。
遊廓があったことは知らなかった。京都の花街のことは知っていたけれど、この辺りの事はまったく知らなかった。
あなた、花街と遊廓は違いますよ、とお婆さんは小さな声でおしゃべりを続ける。　上七軒、祇園、先斗町、宮川町、島原…。
それらが花街であって、ここはそのようには歴史に名前が残らない場所なのだ。私娼窟、女郎街。
あなた、あなたとお婆さんの声がする。月見草は一夜花。朝になればもう赤く萎れているさかい…。
もうすっかり夜となり、家の灯りから離れた床机も、お婆さんの姿もすっかり闇に紛れてしまい、振り返っても見えなくなってしまった。闇の中から声だけが響いてくる
あなた、あなた…。　（了）

嘉原
嘉原

春の點

蜥蜴が虫を食べている石垣に
針模様
待ち人の影に
闇雲の鋲
桜花の中に鳥
　　空　高く
　　銀の虫が架けた白い糸が融けだして
　　路地に篠つく
　　春の點

こうつと、こうつと

1

　暑い。とにかく暑い。
　どうもこの家のものは、猫は暑さに強いと思いこんでいるふしがある。犬はいい。はぁはぁと舌を垂らし、これ見よがしにアピールできる。
わたしたち猫にはそれがない。くそぉー。

　今日は、さっきまでお母さんと一緒にいた居間が涼しかった。けれども、午前中からおでかけ。部屋はたちまち暑くなってきた。暑いものは暑い。犬や人が暑いのなら猫も暑いのだ。何故に「猫は暑さに強いんやねえ」などと勝手なことがいえるんだろう。

　それにしても暑いなあ…。さあ、また挑戦してみよう…。

2

　暑い。とにかく暑い。
　それと湿気の酷いこと。まるで蒸し風呂の中を歩いているみたいだ。今日は社会保険事務所へ年金の加入記録について確かめに行く。娘はネットで確かめれば、というけれど、申し込んでも一週間ほど待たされるわけだし、それならば直接、窓口で確かめた方がいいようにおもえたのだ。転職をしていない人でも加入記録が消えている人もいるというし、名前の読みが何通りかできる人も「別人」になっているというから、やはり気になって仕方がない。

　それにしても、こんな暑さの中をこんなことで出向いていくなんて情けない、とおもいながらバス停に向かって歩いていた。
「情けない」といえば、今朝も娘に叱られた。娘が学校から帰宅すると居間のクーラーがかけっぱなしになっていたのだという。猫のタエちゃんがお腹を出し、のびをして寝ころんでいたというのだ。

　毎日、私が仕事を終え夕食の買い物をしているあいだに娘が帰宅しているのだが、
「帰ってきて、部屋が涼しいのはありがたいけれど、ちょっと電気の無駄遣いじゃない」という。
　普段私が、携帯の料金のことでうるさくいうので、ここぞとばかりに言いつのる。

「それ、ほんと？」といいたいところだけれど、そんな嘘をいう娘ではないので、わたしは首をひねるばかり。
　うーん、とうとうお母さんもうっかりミスが…。ボケだしたんかなぁ、などといって逃げた。
　だけど、消し忘れたとは本当におもえないのだ。今日だって、きっちり消してきたし。
　と、そこで不安がじわりと心にひろがりはじめた。確かに消したはずだけれど、もしついたままだとしたら…。　本当にボケはじめたのかもしれない。それに第一、電気代が馬鹿にならない。娘にもまた責められるし…　私は家に引き返した。

3

玄関の施錠は大丈夫。そろりと玄関をあける。しかしなんだか心なしか涼しいような気がする。室外の音もするような…。いや、あれはきっとお隣さんのだ。

廊下から居間の前に立って、妙な音が聞こえた。

…こうつと　こうつと　　こうつと…

音？声？

全身が緊張した。…声だとしたら…泥棒！…。それにしてはとても小さい声だ。

…ラジオ？いや消したはず…

扉をそっと開けた。六歳になる猫のタエちゃんの白いまあるい背中が見えた。お座りをしている。出かけるときはすやすやと寝ていたのだけれども…。

タエちゃんの右の前足が何かを懸命に押している。押すたびに「こうつと　こうつと」とという声が聞こえてきた。

息をのんだ。

タエちゃんがしゃべってる。そして一心不乱に何かを押している。一歩踏み込んでもこちらに気がつかない。

「こうつと　こうつと　こうつと」

タエちゃんが押しているのは、なんとクーラーのリモコンのようだ。喉の奥に「ああ」という声を押し殺して、もう一歩近づく。

ぴっ

私とタエちゃんが同時にクーラーを見上げた。グリーンのランプが点灯し、やがてさぁーっと涼しい風が流れ出した。

タエちゃんがころんと体を畳に投げ出した。声をかけようとしたら、大きく体を伸ばして腕を上げてこちらを振り返った。

お互いまるで「ようっ」といったような…いわないような。

（了）

老眼鏡

　我が家は南北に延びる路地の東側で南端から二軒目になる。
この路地は東西それぞれ七軒ずつの家が並んでいる。つまり１４軒の家がある。そのうち三軒には誰も住んでいない。ついこないだまでは二軒だったのだけれど、先月、北端西側の独り住まいのお爺さんが亡くなった。
　南端西側もお婆さんが独りで住んでいる。北から三軒目東側の家には老夫婦が二人だけで住んでいる。
　先月、北端西側のお爺さんが亡くなった時に、町内で集まり、これからの町内からの香典だとか、誰かが亡くなった時の連絡網の確認をした。
　誰がいつ亡くなっても不思議ではないからだろうか、誰もが率直に発言し結局一律負担の額を５００円減額した。年金生活者の生活は質素そのものなのだ。
　最後に確認書をいちばん年寄りのお婆さんが老眼鏡をかけて読み上げて、路地の「会議」は終了した。

　うちの向かいの家の娘、そしてわたし、西側北から二軒目のお医者さんの奥さん、うちの隣の奥さん、この四人がいちばん若いので、これからは回覧板の起点となったり、町費などの徴収と管理をこの四人の回り持ちでやっていく事になるだろう。
　若いといってもみんな老眼鏡をかけ始めているのだが。

　路地に面したそれぞれの玄関には植栽があって、路地全体はいつも華やいでいる。空き家の軒先にまでゼラニュウムやらマーガレットなどを鉢に植えて並べていて、朝は水遣りにでてくる人たちの声が硬い空気を砕いている。

　植えられているのはそんなに珍しいものや高価なものはない。
　それでも話題になるのは新しい植物。ホームセンターで誰かが購入してきてはみんなで話題になるのだけれど、ラベルの字が小さくて老眼鏡がないと誰も読めない。
　そのたびに笑い声が響く。
「ははは、どうでもええやん」

　ある朝、おばさんが黒い幼猫を胸に抱いて、路地に出て打ち水をするみんなになにか聞いている。
　その野良の幼猫が捨てられていたのだという。がりがりに痩せてふらふらしていたので、猫ミルクを与え、そして湯たんぽを置き暖かな寝床をつくってあげたら
「すっかり回復したねん」
　と、おばさんは胸をはっている。
「ところがやねん」
　さて、抱いてみたところ雄か雌かわからない。ご本人もそうだが出てきた誰もが老眼鏡をかけていた。慌てて老眼鏡をとりに帰る人もいた。
　だけどわからない。

　幼猫をいくつもの凸レンズが覗く。
　午前１０時になったら獣医さんのとこにいくねんけど、不思議やなあ、といいながらおばさんは家に戻っていった。

　その日の夕方、夕陽の中で植栽の様子を見ている路地の住人たちが、また白い猫を中心に輪を作った。

「それがやな、いきなり、わからへんなあって言わはんねん」
　幼猫の性別は外見からではとてもわかりにくいのだそうだ。もちろんその獣医の一言は冗談で、白い幼猫は雄だという。
「うちの爺さんは『ふぐり』がはっきりせえへんいうてまだ信用しよらん。」
「そう言うのも無理ないわ。素人ではわからへんでこれ」
　凸レンズに反射した夕日が子猫の周りできらきらと波のように揺れた。

「お爺さんが生きてる間には分かるて」誰かが言った。
「そらそうやないと」
　笑い声がさざ波のようにひろがった。　その猫は「のぞみ」という名で路地の一員になっている。
（了）

火花

朝顔

白い服の老女は水遣りをし
少女の写生は葉の曲線にさしかかる
火花が降っている

昼顔

風のたまりに眠るふたりの女
金魚の水に光が撥ねて
影を火花が駆け回る

夕顔

少女の声は橙の窓のうち
解ける花を待つ床の横顔に
糸のような火花が弾ける

蝉の羽色

　ぼくたちの住まいを変えることになった。今までは二人でマンションに住んでいたのだけれど、老いの目立つ妻の母と同居することになったのだ。義母は西陣の家で独り暮らしをしていて、どうせなら二人の職場に近いことにもあるから義母の家にこないかという話になった。ぼくらは古い町家をリフォームし、これから引っ越す。結婚して５年。子供はまだいない。
　妻の圭子は染織製品の問屋で働いていて、ぼくはちいさな喫茶店をやっている。圭子は西陣へ、ぼくは下鴨へそれぞれ仕事に行く。結婚した頃はふたりともそんなにお金はなく、ましてぼくは開店したばかりの自分の店に有り金のほとんどをつぎ込んでいた。だからぼくたちは市の北はずれの山の近くのアパートに住んでいた。引っ越せば圭子は職場まで自転車ですぐになる。ぼくは帰り道の急勾配がなくなり、東西に移動するだけですむ。

　圭子の実家は典型的な京都の町家で、いわゆる鰻の寝床だ。町家はそもそもが中世の市民たちの節税の智恵から生まれたものだから、狭さに対する工夫はあるものの、使い勝手は悪い。特に老人には辛い段差がけっこうある。ぼくらは全面改装を施し、もちろん義母のためにバリアフリーにした。さて、いよいよ引っ越しという時になって義母から注文がついた。
「方違えをせなあきまへんえ」という。

　ぼくの店は下鴨の古い森の近くにある。名前は「縹」。圭子がつけてくれた。「縹」は「はなだ」と読み、染めの色の名前だ。色の名前を指定してくる客が「縹色」を「花田色」という当て字で書いてくることが多いのだという。ぼくの名前が花田哲史で、その逆を使ったというわけだ。藍系の色である。裏の神社の森とも雰囲気が合うから、と。
　むろんぼくの知るよしもなく、圭子にその色に染めた端切れを見せてもらって初めて知ったのだった。もちろん店内の小物は色の濃いものから薄いものまで「縹色系」のものばかりである。狭いカウンターだけの喫茶店で六人が座ればいっぱいになる。そんな店だから好きなジャズも小さな音で鳴らしている。
　今日、閉店間際の「縹」に仕事を終えた圭子が来た。客はいなくて閉店のテーマに使っているジョニー・ハートマンをかけながら洗い物をしているところだった。
「うーん、夜の入り口のような音楽やね」
「そうや、これから夜ってこと」「お茶や珈琲の時間はもうおしまいって？」
「そう」
「ほな、早めに例の『方違え』の説明をするわね」
　そういうと圭子は白い紙とペンを取り出した。白くて華奢な手がペンを握った。
「わたしたちのマンションがここだとするわね」そこにＡと書き、丸で囲む。
「で、実家がここ」そこにＢと書き、同じように丸で囲む。それを矢印で結んで

「これは南西の方角になるの。引っ越しする時にその方角に差し障りのある神様がいる時は、迂回して南のＣ地点に一度移動して、そこからＢにはいらないとあかんの」
と離れたところにＣを書く。
「そんなん今でもやってたん」
「うちは昔から神社の人に頼んでいちいち決めてたんやて」
「ふーん、で、どうしたらええの」
「このＣ地点で一泊して欲しいの。そうしたら実家にはいるのは真西からになるさかい。それでお母さんの気がすむんやから、ね」
「ああ、ええよ。そやけどそのあたりに泊まるところあったかな」
「うん、おばさんのとこやったらどう、って」
「おばさん、て、大沢さんやん。ということは典子のとこ？」
「そう」
「ふーん」
「あ、典子はいないから。イギリスにずっと行ってるし」
　大沢典子は圭子のいとこで、ぼくと圭子と典子は同じ高校の同級生だった。圭子と典子はまるで双子のように似ていた。

　『方違え』というのは、その日時、移動する人、移動する場所で全く異なってくる。まるで陰陽師のような人が、いまでもそれを見てくれるのだ。昔ほど厳格ではないにしても、町ではそのような昔ながらの慣わしに従って暮らしの節々を決めている家が多くある。
　今回のぼくの場合、ぼくと圭子の二人が大沢宅で一泊するのだろうと思っていたのだけれど、圭子は実家に「戻る」だけだから、とぼくだけが一泊することになった。

　この家には高校時代に何度か遊びに行ったことがある。ぼくと圭子、ほかにも何人かのクラスメイトもいた。仲良し連中でわいわいとだべったり、ゲームをしていたぐらいのことなんだけれど。そんな中からぼくと圭子が二人でつきあいだし、そして結婚したのだ。
　典子はとても静かな女の子だった。活発な圭子とは好対照だった。二人に共通しているのは、何かひとつのことをこつこつとやり続けること。そしてその時の熱が、圭子は外に向かって発散され、典子は内へ内へと向かっているようにみえた。
「私も一緒に行く。おばさんに挨拶もせなあかんし。一人でさみしいんなら私も泊めてもらってもええんやけど」
「一泊だけやろ。そんな大袈裟なことでもないやん」
　簡単な着替えとタオルを持って、ぼくは圭子と大沢宅へ向かった。鴨川の近くにある古い大きな町家である。家にはおばさんが独りで住んでいる。ご主人は３年前に他界されていた。二人いる息子は仕事の関係で京都の外に住んでいて、典子はイギリスに英文学の研究のために再度の留学を続けていた。

店を早めに閉めて、圭子と二人でおばさんの家に着いた時は午後８時を回っていた。　典子のお母さんは小さくて華奢な印象の人で、高校の時によく遊びに来た頃より少し歳をとられたように思えたけれど、雰囲気は同じだった。
広い玄関をあがり、すぐ右手の応接間に通された。壁に土田麦遷の絵が掛けてある。
「ひさしぶりやねぇ。二人ともすっかり落ちつかはって。 お母さんのとこに帰るんやて、そらええことやわあ」
「母ももう歳やし、少しずつやけれど身体もしんどなってきてるみたいやし。わたしらもそろそろ引っ越そうか、いうてた時やし、時期がおうたんやね」と圭子。
「ほんまにねぇ、うらやましいわ。うちなんかわたし一人やろ、なんやさみしいなあ。典子が帰ってきてくれたら、また変わるんやろけど」
「典ちゃん、いつ帰ってくるのん」
「一応、来年なんやけどな…」
おばさんとぼくはテーブルを挟んで座り、圭子はおばさんの横に斜めに座って体をおばさんに向けていた。さっきからおばさんの作務衣の袖にそっと触れている。

「あ、この着物あんたとこの生地でこさえたんやったね。気に入ってるんよ」
「うん、すぐわかった。あ、着てくれてはる、て。嬉しっ。ありがとう」
「哲史さん、この子の会社で染めはった生地でね、私は作務衣。典子はシャツをつくりましてん。普段はこの方がずっと楽でねえ。あんたも確か…」
「私と母はシャツです」
「珍しいね、この色」
「これはね『蝉の羽色』ていうんよ」
「蝉の羽？」
「うん、蝉の抜け殻の色ともいうんやけどね」
「ああ、そういわれるとわかるなあ」
「典ちゃんにこんな色がある、いうて話ししたら、もの凄く興味持ってくれて、おばさんにも話してくれてね」
「私、昔から着物ばかりやったの。おぼえてはるやろか」
「ええ、高校の時、よう上がらせてもろてたでしょ。うん、憶えてますよ」
「それがなあ、主人が入院してから、毎日、病院へ通わなあかんようになってねえ。ところが和服やと動きにくいんです。で典子に言われて、初めてズボンを穿きましてん。それがまあ楽でねぇ。世の中にこんな楽な服があるのやわてと思いましたえ」
おばさんと圭子が顔を見合わせて笑った。
それからおばさんはスラックス姿で自転車に乗り毎日病院通い。家ではほとんど作務衣を着る

ことになったという。それでも和装や染めには興味があって、圭子の持ってくる生地もよく見ていたのだ。
「そうやねえ、あの時は典子がえらい乗り気やったねえ」

おばさんのご主人は癌で亡くなった。発見された時から僅か一年しか時間は残されていなかった。典子はイギリスでの研究生活をいったん切り上げて帰国し、母と共に父の看護にあたっていた。近くに住む親族たちも放って置くはずもなく、圭子も、圭子の母も大沢家のバックアップにまわっていたことを思い出す。おばさんは毎日病院に詰めていたから、家のことは典子がほとんど仕切っていた。
圭子と一緒に典子の「陣中見舞い」にいったこともある。

圭子と典子、双子のような二人。
狭い肩幅。細い首、ちいさな顔、細いからだ。ちいさな手と足。姿勢はいつも胸をはっていて、一重の涼しげな眼と真っ黒な髪。
そんな二人が並ぶと、ずっと一緒に暮らしている双子の姉妹のように感じられる。

家に行った時、典子はオーバーサイズの白い長袖のシャツに黒のツータックのパンツだった。それに黒のズック靴が、典子のトレードマークのようなお気に入りのスタイルだった。
その細い眼が光る時がある。
例えば圭子が、哲史君、いっしょに祇園の何必館にクレー、みにいかへんといって初めてのデートを提案した時とか。
例えば典子が、圭子から、わたし哲史君とつきあってるねん、とぼくの目の前で聴かされた時とか。
人に対して好きといういう時、唇が震えるものなのだということは圭子を見て知ったし、相手が信用できるかどうかわからない時は眼の底まで覗き込むように見つめるのだということを典子で経験した。二人が同じ色のシャツを着ている。
「蝉の羽色」。

町家の二階の奥の部屋にぼくは案内された。四畳半の畳部屋に布団が敷かれていた。他には電気スタンドが枕元にあるだけである。ちいさなバックからウォークマンを出して何か聴こうかと思ったけれど、聴く気がしない。文庫本でも、と思ったけれどそんな気にもならない。
一晩過ぎればいいのだからさっさと寝ようと思い、着替えて布団の中に体を滑り込ませ、部屋の灯りを消した。
その途端、はっ、とした。
あまりに闇が濃かったのである。それこそ墨を塗り込めたような闇だった。

町家の真ん中で、おばさんは階下にいて、二階の電灯は全部落ちている。そして襖の閉められたこの部屋には窓が無い。町の音も全く聞こえてこなかった。
こんな闇は久しぶりだった。考えてみれば店も部屋も、夜に外から光の干渉が少なからずあった。いや、夜、月明かりすら入り込まない部屋で眠るのは、雨戸を閉めて寝る習慣のあった母親と暮らしていた頃以来だろうと思う。
最初は落ち着かなかったけれど、やがて眠りに落ちた。

その夜に、夢ともうつつともつかない経験をした。
夜半であることは間違いなかった。気がつくとぼくの左掌は誰かの掌に握られていた。　ちいさな手。骨の張り方、つるりとした皮膚の感覚。…圭子、と思った。
圭子は実家に帰って行ったけれど、まったく不安のない心持ちの原因は、この掌が圭子のものだからだ、と思った。驚かそうとして…子供みたいな…。体を寄せて圭子に向き合おうとして、戸惑いが全身にひろがっていった。体が動かないのである。

夢なのか。しかし、掌の感触はリアルなものだ。眼を開けた、はずである。ただ眼を開けているのか、夢の中で眼を開けているのかわからない。強引に手を引き寄せようと意識した。するとぼくの体に女性の体がぴたりと寄り添った。
ちいさな体。細い体。肩に髪の感触もある。全体は圭子だと頭の中では判断している。長い髪。圭子は短い。…典子？
まさか。
掌は握られたままだった。じっと掌に神経を集中した。これは圭子なのか、それとも典子なのか。
…わからなかった。

いつのまにか眠りに落ちて、いつものように目が覚めた。襖が閉じられた真っ暗な部屋でスタンドの電気をつけると朝の六時になっていた。昨晩のことを思いだし、手をじっと見つめる。
たぶん夢なのだ。何故ならあんなことがあったら恐怖があるはずなのに、全くなかった。なにか「親しい手」とさえ感じていたのだから。
階下に降りると、おばさんが朝食の準備をはじめていた。
「おはようございます」
「おはよう。よう寝られた」
「ええ」

顔を洗い、昔、土間だった台所から上がったところにある茶の間で食事を待ちながらラジオを聴いていた。おばさんはテレビをほとんど見ない。まして台所に立っている時は画面を見ることができないからラヂオを背後でずっとならしている。茶の間と台所の間に置かれたちいさなラジカ

セから今日の天気やら昨日のニュースが流れていて、ふたりの耳がラジオを挟んでむかいあっているようだった。

「また暑くなるようやねえ」
「ええ、迂闊に外にはでられませんねえ」「ほんまにねえ」

　ワカメのみそ汁とごはん。浅漬けに納豆。海苔と梅干し。ちいさなみりん干しも。ぼくらは向かい合って朝食をいただいていた。

「哲史さん、お魚、上手に食べはるんやねえ。うん、上手やわ」
「そうですかね」
「うちの子らでも、まあ最近の若い人たちはみんなそうなんかもしれへんけれど、お箸の使い方がへたでしょう。哲史さん、上手ですよ」
「はは、いやあなんやろ…」
「それに指もきれいなんやねえ。あの子、あんたのそういうところが好きになったんやわ」「圭子はなんにもいうてくれませんけれど」
「ああ、圭ちゃんやのおて、典子ですよ」
「え、典子…さんが、ですか」
「ふふ、気いつかへんかった？うちの娘も可哀相なこやなあ」
「……。」
「ごめんごめん。冗談よ。典子は、あなたと圭ちゃんの結婚をとても喜んでいたしね、うちの人にもいろいろとあなたのことを褒めていたのよ。真面目な人や、いうてね」

　典子の父、つまり圭子の伯父は西陣の織物製造会社の社長で、喫茶店や水商売は「仕事」に非ず、という考え方の持ち主だった。圭子は伯父から何度かぼくを「まともな職」につけるようにできないのかと言われていた。圭子の父は、気にするな、と言ってくれていたが…。典子までそんなふうに言ってくれていたのだ。
　その二人の男は、今ではとも他界してしまった。二人の男の住んでいた古い町家には妻と娘だけが残り、ぼくは今日からその町屋に入っていく。

　ふと、おばさんの手をみた。白い、ちいさな手。すらりとしていて指が長い。圭子の手と同じかたちをしている。

「あの、変なこと聞きますけど、典ちゃんもおばさんと同じ手でしょうか？」
「うん？どうして」
「いや、おばさんの手こそ綺麗ですよ。それとなんだか圭子の手にも似ているような気がして」
「そうねえ」おばさんは自分の手を眺めた。

「わたしと純子（圭子の母）さんもよく似てるでしょ。圭ちゃんと典子ほどじゃないにしても。だからたぶんわたしたちは四人とも同じかたちの手をしてるかも」
　一瞬、夜の、握ってきた手が頭に閃いた。
「へえ、そんなに綺麗？」
「ええ」
「じょうず、いわはんねんね。『へえおおきにい』」
おばさんがおどけて舞妓さん真似をしていった。
　ふふ。
　ははは。

「ただいま…で、いいのかな」
「おかえりぃ。なにゆうてはんの、自分の家やないの」
　義母さんが迎えに出てくれた。お昼前。圭子は仕事にいっている。
「荷物かたずけますね」
　この日が来るまでぼくは家にはいることができなかったから、自分の部屋に段ボールが山積みになっている。
「なんや圭子がちょこちょこやってました。服とかはできるから、いうて」
「あ、そうですか。助かるな」
「まあ、お茶でもどおどす」

　基本的には大沢家と同じ造りの京町家の家。だが老人には厳しすぎる部分の多い建物は、バリアフリーを主眼に大改造が施されている。真っ暗な建物中央部は、天井板の一部を切り取り強化硝子の瓦にしてある。大沢家のような真っ暗な部屋はないし、全体がとても明るい。土間ではなく板の間の続きになっている台所で義母さんがお茶を入れてくれている。
「哲史さんは初めてやったねえ。できあがりの家に入るのん」
「工事中には何度か見に来ましたけど、完成後は…そうですねえ」

　玄関脇の和テーブルと椅子のある居間でお茶をいただく。膝の悪い義母さんのために「椅子づかい」の家具が多い。土壁にちいさな竹筒がかけてあり、白い朝顔が一輪いけてある。

「ご苦労さんどしたねえ。『方違え』なんてやらはる家はほとんどないし、せんでええんがための神社さんもあるんやけれど、この家が昔からお世話になっている『お方』がいはりましてねえ」
「いいえ、おばさんともいろいろお話しできましたから。そんな苦になんて」
「良子さん、何かゆうてはりました」

「典子さんのこととか」
「典ちゃんいつ帰ってくるんやろねえ」
「もう少しいるみたいですよ」

　頷きながらお茶を飲む義母さんの手を見ていた。同じ手に見える。まして義母さんも「蝉の羽色」の作務衣を着ていたから、何度かおばさんと錯覚しそうになった。
「今日から三人やねえ」
「はあ、よろしくお願いします」
「いいえぇ、こちらこそよろしゅうに」

　午後三時。荷物の片づけはだいたい終わって、たまたま手にした古い雑誌を思わず読みふけっていた時だった。遠雷がなった。
　階下に行こうとしたら、かあさんが上がってくるところだった。
「洗濯物取り込みましょうか」
「そう、なんや降ってきそうでしょ」
　二人で急いで物干しまでいった。夏だから洗濯物のほとんど乾いている。物干しにぼくが立った時、ちょうど黒いしみがばらばらと広がった。
「さあ、急がないと」
　ぼくが大急ぎで洗濯物を取り込んでは部屋にいるかあさんに渡していく。
「はいっはいっ」と、なんだかはしゃぎながら受け取ってくれる。

　部屋の中で仕分けていて、ふっと手が重なった。
　ほんの瞬間だったけれど、それは夜の中で握りしめた手に驚くほど似た感触だった。
「どうしはったん？」
「えっ」
「ああ、そのハンカチは主人の。ねえ、いついれたんかバッグに入っていて。まだ、ね、哲史さんが使えるな、おもてね。ええ、それはこっちにもろときます」
「はい」
　俄雨はもうあがっていた。

「そういうことがあったんや」
　そういいながら、ぼくは圭子とかあさんの顔を見た。ぼくらは夕食の後三人で手早く片づけを済ませると、そのままダイニングテーブルを囲み、椅子に腰掛けてお茶を飲んでいた。かあさんの生活のほとんどが椅子を使うようになって膝と腰が楽になった、という話の後で、ぼくが夜中に手を握りしめられた話をしたのだ。

　圭子が顔をこちらに向けた。
「全然怖くなかったの」
「最初はびっくりした。けど怖くならへんかった。圭子の手と同じやって感じたしね」
「わたしの」
「そう。お前と手を繋いでいるような感覚やったから。夢かもしれへんけど」
「まあ夢でも私と会いたいのお。うれしい」
　半分、茶化すように圭子が言った。
「ふふふ。まあ　まあ」
　かあさんが静かに笑った。
「そうやで。いつでも一緒にいたい」
　それはほんとうの気持ちだった。
「そやけど夢じゃないとしたら…」
「ふふ、おばさんかも」
「そんなことないやろ」とかあさん
「わからへんよ。おばさんもあんたのファンやし」
「哲史さんはそれだけあんたが好きなんよ。夢の中でもあいたいやて…私もいちど言われてみたかった」
　かあさんのその一言でぼくの夜の経験は封をされたようだった。
　かあさんが早めに寝るから、といって自室にさがり、二人だけでダイニングテーブルに座っていた。この話をしている途中からずっとテーブルの下で圭子がぼくの手を握っている。
「私たち四人の気持ちがあんたの手を握りしめにいったんかな」
「なんのために」
「ずっと一緒に過ごしたいさかい」
ぼくらはそのまま立ちあがった。圭子のちいさな手にきゅっと力が入った。
（了）

朝の匂いのする手紙

　その日は土曜日。私の仕事は休みで、父が旅行に出てから三日が過ぎていた。
　母と私と犬のジョリーと、二人と一頭の生活は本当の久しぶりのことだった。父が旅行に出かけた初日なんて、ぽかんと開いた父のスペースが妙に気になって、家中に違和感がしたのだけれど、それにも少し慣れた頃だった。
「とうさんどうしているかしらね」
　少し遅い朝食の準備をしながら、母が独り言のように呟いた。
「ん、心配なの？大丈夫よ、子供じゃないんだから」
「そりゃそうだけれど、もう歳が歳だからね。無理しなきゃいいんだけど」

　父が一人で旅行に行きたいと言いだしたのは、定年退職をしてすぐのことだった。わたしの知っているかぎりでは、父はいつも仕事に追われていて、プライベートな旅行とはまったく無縁だった。もちろん母もわたしも反対する理由なんてなにもなかった。
　温泉に行く、というからてっきり湯治かと思っていたら、行き先は長野県の松本だった。なんと以前勤務していた場所、つまり私たち家族が大阪に来る前に住んでいた場所へいくのだという。そこは確かに浅間温泉という温泉もあって、一家はそのはずれの南浅間というところに住んでいた。そして、そこは私が生まれた場所でもある。ただ３歳までしかいなかったから、あまり憶えていないけれど。父は湯治がてらに昔の場所をみたくなったのだという。

　父は新聞局に勤務していて、当時の仕事は山岳などの自然や環境の記事の取材制作だった。母によれば、松本にいたときはほとんど外に出ずっぱりだったのだという。
「そりゃあ、一週間でも十日でも山に入りっぱなしということもあったんだから」
　転勤し、そして年齢の関係もあって、大阪にきてからは事務職になり、そのまま定年を迎えたのだ。だから私の記憶の中には、父が北アルプスを跋扈していたという姿はない。
「おとうさんは、松本の頃が恋しいんだね」と母。

　そういえば、定年が近づいてきて、これまでの資料などを整理しながら父が棚に丁寧に並べていたのは山の関係のものばかりだった。それ以外のものは惜しげもなくさっさと捨ててしまっていた。
…山が好きなんだ…
　父が私たち家族に、これはぼくの宝だといったテレビ番組がある。それは北アルプスの自然をスケッチした１５分ぐらいの番組で、今でいう環境映像のはしりのような番組だった。父はガイドとして出演していた。それがテレビで再放送された日に家で撮ったビデオが、父の４０年間勤め上げた仕事の最大の宝物だった。
　現地の植物のポイント、川の瀬の美しいポイント、山翳のうつろうポイント、虫や鳥のポイント、みんなで山に入って決めてさ、とすっかり生まれた東京の言葉に戻って喋る父の顔は輝いていた。

「山歩きをしているかもね」
「うーん、でも背広に鞄一つでいっちゃったけれど」
「温泉街をぶらぶらしてるかな」

　昼過ぎ、散歩をねだるジョリーと散歩に出た。ゴールデンレトリバーのジョリーは歩くのが大好きだ。緩やかな坂の上り下りになっているニュータウンの外周道路を舐めるように吹く風と歩いた。
　５月、街中の緑が優しく揺れている。空はとても高くて、雲雀が太陽めがけて弾けるように飛んでいた。
　これからは父が家にずっといる。ジョリーの散歩は父が独占するかもしれない。歩くのが好きだから。

　それも山を歩いていたからかな。
「ね、ジョリー」
　ゴールデンレトリバーはとにかくよく笑顔をふりまく。「犬は笑わない」という人はゴールデンを知らない人だ。そのときもジョリーは素晴らしい笑顔を返してくれた。
　家へもどり、ジョリーの足を洗い、飲み水を替えてあげる。そのまま家に入ると、母が紅茶をいれる用意をしていた。
「へへ、とうさんから手紙がきたわよ」
「ふふ」
「ふふふ」
「あれっ封書なんだ。それも速達」
「読んでみて」
　封は切られていて、一枚の便箋がテーブルの上においてある。

　おかあさん、由紀子へ
とうさんは今、浅間温泉の旅館ででこの手紙を書いています。
今日２０年ぶりに、一家が昔住んでいた県営住宅のあたりを散歩してきました。
なんにも変わっていなかった。住んでいる人たちはもうすっかり変わっていたけれどね。
小さかった由紀子を抱いて歩いた堤防は、舗装はされていたけれどあとは一緒。
女鳥羽川の流れもまったく変わっていなかった。
なんだかタイムスリップしたような気分。なかなかいいもんです。
同封したのは、女鳥羽川の堤防の並木になっていたニセアカシアの花です。
一応、半紙で挟んでいるけれど、押し花にしたいから、新聞に挟んだ上に広辞苑を置いといてほしい。
ニセアカシアの並木はとても立派になっていました。明日はよく仕事で行っていた梓川に行ってきます。
あさってには帰る予定を連絡するから
とうさんより
「あなた女鳥羽川、憶えてる」
　母がダージリンをテーブルに置きながらいった。
「うーん、はっきりは憶えてないなー」
「梅雨の前ぐらいにね白い花がさーっと咲くの。あの丸い葉っぱの緑もきれいだった」
「それが堤防の並木？」
「そうよ。堤防に沿ってずっと並木と県営住宅があって、うちは堤防のすぐ下にあったの」
「やっぱり憶えてないな…」

　便箋を置き、封筒からニセアカシアの花と葉を出そうとしたときだった。封から薄いジャスミンのような香りがふわっと流れた。
　とても懐かしい匂いだった。
「あ…」
「どうしたの」
　母がけげんそうにこちらを見る。

　この匂いだ。憶えている。この匂いのあった風景。
　わたしを抱いた父の腕がみえた。
　覗き込んでくる父の顔がみえた。高く抱き上げられて…。
　父がなにかわたしに言ったんだ。
　ゆっくりと視線が堤防の上を越えていき…、

そう、まだ峰に雪の残る北アルプスの山の連なりが目の前に広がっていたんだ。
朝の空気は冷たくて、人の息で曇ってすらいなくて、目も頬もちくちくするような空気だった。
そう、そして川からの緩い風に乗ってこの微かな花の香りが漂ってきたんだ。
「かあさん、思い出した。ニセアカシアの花」
そう、そしてわたしと父の背後に母の笑顔の気配があったんだ。
わたしは「生まれて初めて」家族が共有したかつての時間のひとかけを思い出した。そしてそれがずっとわたしのなかにいつづけたことを知った。ひょっとしたらそれがわたしをずっと支えてくれていたのかもしれないとさえ感じた。
朝の匂いのする手紙が、わたしの幸せの記憶を目覚めさせてくれたのだ。
封筒から白い花の房と緑の丸い葉が一緒に出てきた。半紙は少し湿っていて匂いがそっと部屋にすべりでた。
「藤みたい」
「ジャスミンにも似てるわね」
「いつか育ててみたいね」
二人の口から同じ言葉がこぼれた。

（了）

屋上

屋上は空を盛る皿
仏法僧を見るための黒い椅子に
柔らかなズボンをはいた老母がすわり
声もなく微笑んでいた
陽が私たちを彫り続けている
もう昔へ戻ることはできない
朱の嘴が田園をひとまわり
墨染に瑠璃をのせた翼
母の白髪　私のシャツ
風吹く屋上で

遠い鐘

　ある冬の朝のこと。よく晴れて空気が澄んでいた。玄関横の狭い一角で育てている薔薇から花を切り取ろうとしていると、向こうから黒いコートをしっかりと手で押さえて歩いてくる小柄な老婦人の姿が目に入った。ご近所の鈴木さんである。少しうつむいて、一心に歩いておられる。剪定鋏を宙に止め鈴木さんが顔を上げられたらご挨拶を、と思った。

「こんにちは」
「あ　どうも、お寒いことでございますねえ」
　笑顔でなんども頷かれる。いつものゆっくりとしたとても丁寧な言葉づかいに、こちらの言葉と気持ちも、ゆっくりと落ち着いていく。それがとても心地よかった。
「おや、薔薇でございますか」
「ええ部屋に生けたものが枯れてきましたんで」
「いつも前を通る時の楽しみでございますのよ。どうも最近はお切りになるのが早くて満開の薔薇が拝見できないで残念に思っておりました」
「ああ、つぼみが綻んだくらいには切りますから」
「ああもったいない」
「申し訳ないですねえ。春や秋ならもっと頻繁に蕾ができるのですが冬は数が少なくて。そうですねえ、これを切ってしまうともう多分来年の春まで咲かないでしょう」
「まあ」といいながら鈴木さんの口元はずっと笑顔のままで、眼鏡の奥の細い目も優しくこちらを見つめている。

「わたくしね」と鈴木さんがおっしゃる。
「お出かけしたんでございますのよ。それがバス停の直前でお財布を持っていないことに気がつきましてねおほほほほ」
　　取りに帰りますの」
「それはそれは」
「もう最近こんなことばかりが増えて。もう、すぐ忘れちゃうんですの。ああやだ」

　鈴木さんの頬が少し紅く染まって、眼鏡の奥の目が一瞬、きつくなった。けれどすぐにいつもの笑顔に戻り、目も柔らかな細い目に。
「だけど私は自分を偉い、と励ましておりますの。よくぞバスに乗る前に気がついたって。だって乗っていたらたいそう悲惨なことになっておりましたでしょう」
「ふふふ、そうですねえ」
「ほほほ、ねえ。ですから私は偉いとほめておりましたの」

　ぐおーん

　遠くで鐘の音が響いた。

「おや、今頃鐘が鳴りましたね」
「ほんとに、どちらでしょう」
　この辺りは古いお寺が多く、どこにも立派な鐘楼が置かれている。そして毎日どこのお寺のものなのかわからないけれど、鐘の音が聞こえてくるのだった。しかしそれはきまって午前七時である。
「どこのお寺にしてもこんな時間に変ですね」
「誰かがいたずらしたのかしら」
　鈴木さんは、ああいけないいけないお手間をとらせましたと会釈しながら、そのままお宅のほうへ歩いて行かれた。

　私は薔薇を一輪切り、窓辺の出窓に置いた、去年なくなった犬の遺影の横に活けた。薔薇の名前はプリンセス・ドゥ・モナコ。四季咲きで、しっかりした苗に育ってくれたおかげで、犬の遺影の前からこの薔薇が消えたことはない。

　鈴木さんは私の家の左手の、古いお寺の横の緩い坂道を少し下がった突き当たりにある。かつて我が家に犬が二頭、あちらにも犬が二頭いて、散歩で出会ううちにいろいろとお話をする間柄になっていた。ただこの数年間で鈴木さんは二頭の犬を亡くし、昨年はご主人を亡くされた。仕事をリタイアされたご主人はいつも二頭のテリアを連れておられたけれど、その二匹が亡くなってから、ミニチュアシュナイザーを飼われ、今では奥様とその犬だけがお屋敷に住んでおられる。私はといえば、その間に犬が一頭亡くなり、残ったもう一頭と暮らしている。

次の日。
夕方、玄関前を掃除していると、向こうから鈴木さんが黒いコートの前をしっかりと押さえて歩いてこられる。まるで昨日のビデオテープでも見ているようだ。違うのは昨日は光が後ろからで、今日は前からというぐらい。もう一つは手に「かぼす」のはいった透明なビニール袋をもっておられたこと。小柄で背筋がぴんと伸びて歩く姿はいつものとおり、けれど今日も何か思い詰めたように歩いておられる。

「こんにちは」
「ああどおもでございます。ああよかった。こちらをもらっていただけないかしら」
　と、小走りに私の前にきて手に持ったかぼすの入った袋をぐいと差し出される。
「いえいえこんなもったいないです」
「助けてくださいませ。庭で、もうとれてとれて仕方がなくて、お友達に配っておりますのよ。それでも余って余って…ええ」
「はあ…はあ」

　鈴木家の庭には山桜、ヤマモミジ、椿、山野草などが育てられていた。ないのは薔薇ぐらいのもの。そういえばかぼすの木もあった。以前にも種が落ちて庭に自生しだした山桜の苗を捨てるのに忍びないからもらってくれ、とご主人に呼ばれてはその立派な庭にお邪魔したことがある。

「じつはまだありますの」
　まるで悪戯っ子のように鞄のなかから小分けして袋に詰めたかぼすを見せられる。
「あらまあそれを…」
「そう、配ろうと思ったの。そしたらまた…財布を忘れましておほほほほほ」
「はははははは」
「でも私は偉かった」
「乗る前に思いだした！！…ですね」

「そうでございますのよ。じゃごめんあそばせ」

　ぐおーん

　遠くで鐘がなった。
「あれ、またなりましたね」
「あらほんとうに」
「おかしいな、また悪戯でしょうか」
「悪戯ばかりしていると『つかずの鐘』になりますのに」
「ほんとにそうですねえ」

　鈴木さんはとことこと坂を歩いて行かれる。財布をとりにお家へ帰るのだ。

　「つかずの鐘」とは、京都では、ことに西陣界隈では有名な報恩寺の梵鐘のことである。場所は上京区小川通り寺ノ内。ちょうど表千家の不審庵から南へずっと下がったあたりにある。かつてそのあたりは西陣織の織屋がたくさんあったのだという。で、その始業や終業などの合図に使われていたのが報恩寺の梵鐘だったのだ。

　昔、ある織り屋に仲の悪い丁稚と織子（おりこ）がいた。ある時、夕べの鐘はいくつ鳴るかということで言い争いになった。丁稚は八つといい、織子は九つといった。で、負けた方は相手のいうことをなんでもするということになった。本当は九つだったのだが、悪賢い丁稚は寺男に今日だけは八つにしてくれと頼み込んでいたのだった。果たしてその日の夕べの鐘は八つしか鳴らなかった。それみたことかと丁稚が織子を責め立てると、織子は梵鐘に帯を掛け首をくくって死んでしまったのだ。それが世間に知られることになり、寺では夕べの鐘を突かないことになったという。

　「つかずの鐘」のいいつたえを思いだしてから、何故そんなことで首をくくるのだという思いが脳裏に引っかかった。
　…まるで今といっしょじゃないか…
　イジメにあった子供たちの痛ましい自死の報道を何度も聴いたり見てきたせいだろうか、何故、という思いがなかなか消せない。いったい丁稚は織子に何を要求したのだろう。まだお互い子供である。法外な要求をしたところで、親に言いつけたり、何より織屋の親方に言いつければ一喝されてそれで終わるはずだ。金の無心にしたってお互い金の持ち合わせなどないことはよく知っているはずだ。俺の嫁になれなどといわれたって子供にできるはずもない。なんだろう…。そう、それに悔しくてもぐっと耐えて一日待てば鐘は九つ鳴ったのだ。何故だ。何故そんなふうに首をくくってしまうのだ。

　いやいやそうではない。何かをされたから死んだのではない。悔しかったのだ。夕べに九つ鳴るというのは当たり前のことだ。毎日鳴っているのだから間違えるはずもない。 だから織子は寺男もぐるだということに気がついたのだ。そうに違いない。言葉の暴力や肉体の暴力には立ち向かえるし、逃げることもできる。しかし、深い絶望に捕まったら人は…どうだろう…命を投げ出してしまいかねない。深い絶望が冬の夕暮れのように織子を突然襲ったのだとしたら。
（注・丁稚は店の雑用や使い走りをする。織り子は織機について織る職人）

　なんとしてもそのあたりの事情が知りたくなった。明日は報恩寺へでかけてみよう。由緒書きが掲げられているかもしれないから。
　仕事を退職して数年。時間は山ほどある。

翌日はとても冷え込んだ。強い北西の風が吹き渡る空には雲一つなかった。
我が家から報恩寺へ行くには、長い坂道をずっと下っていけばよい。古くからの区画のままに、平安時代から現代までの各時代の建築物が混在する何ともいえぬ雰囲気が漂う通りである。艶や脂っ気が抜けた骸骨のような家並みが続くかと思えば、老賢人のたたずまいを思わせるお寺があったり、戦後昭和を代表するようなコンクリートの打ちっ放しの家がある。それでいてどの家の前にも犬矢来があったり、鬼門に南天を植えていたりするからおもしろい。西から東へ、灰色の海をサーフィンするようにでこぼこ道を自転車で軽く飛んだりしながら下っていった。

広い堀川通りを渡ると、左手は茶道の千家さんの庵を中心とした町並みで、右手は西陣のはずれの下町風情。お寺がたくさんある。だからそんな中にある報恩寺は、きらびやかな観光名所のお寺とは違い、庶民の寺である。境内を未舗装の駐車場にしていたり、土地が様々に小さく切り取られていたりもする。
門の前で自転車を降り、「つかずの鐘」に向かって歩いていった。
つかずの鐘の前に立って熱心に案内文を読んでいる老婦人がおられる。灰色の髪、今日はその上に青い羽根のついた黒い帽子が載っている、黒いコート、黒い鞄、小さな体の背筋はピンと伸びていて、眼鏡のレンズに反射した光がこちらの眼を刺してくる。
あ、とたぶん声が出ていたろう。

「鈴木さんじゃありませんか」
くるりと体が振り向き、いつもの優しい細い眼がこちらにまっすぐに向けられた。
「あらまあこれは奇遇でございますこと。あ、奇遇じゃないわね。おほほほほ」
「どうも鐘の由来が気になりましてね。年金生活者は時間だけは不自由しませんもので」
「同じく、でございますの。実はこの本にも出ていましてね、どうも合点がいきませんのよ」
鈴木さんは黒い鞄から一冊の本を取り出された。

『京都・観光文化検定試験公式テキストブック』と書いてある。いわゆる「京都検定」の公式テキストである。「京都検定」とは京都商工会議所が２００４年から始めた、いってみれば「京都通」にお墨付きを与える検定である。年に一度試験があり、一定の点数を獲得すると、一級から三級までの級が与えられる。三級は択一試験で比較的与しやすいけれど、二級はやや難しくなり、一級は論述式の問題までありかなり難関である。
昨年は全国から多くのかたが受験にこられたという。この資格があるからといって何か特別な職業につけるわけでもなく、具体的な恩恵はなにもない。にもかかわらず今年も受験者は増えた。

「鈴木さんも『京都検定』受けられたんですか」
「ええおもしろそうでしょ。京都のことも勉強し直せるかと思いまして。合格するかどうかは二の次。実はもうやさしい方は去年、合格しましたのよ」
鈴木さんは主婦でもいらしたけれど、水彩画家でもあり俳句もつくられる。犬の散歩で出会うたびに展覧会の招待券をいただいたり、句集をいただいていた。やりたいことはどんどやられるのだ。

「読ませていただけますか」
「はいはいどおぞ」

撞かずの鐘（上京区小川通り寺ノ内　報恩寺）
西陣にある報恩寺の梵鐘は、朝夕の織屋の仕事の交代を告げる。「八半」という織屋の１５歳の丁稚と１３歳の織り子はいつもいがみあいをする仲であった。ある時、夕べの鐘はいくつ鳴るかということで、織り子は九つ、丁稚は八つと言い張り、負けた方は何でもすると約束した。実際は九つであったが、丁稚は寺男に八つにしてくれと頼んだ。鐘を

聞いた丁稚が織り子をせめ、織り子は鐘楼に帯を掛け首をくくって死んでしまった。その後はお寺も夕方の鐘を撞かないこととし、以来、撞かずの鐘と呼ばれるようになった。

（２００５年４月６日発行　改訂版京都・観光文化検定試験公式テキストブックより）

「お会いするたびに鐘が鳴りましたでしょう。で、悪戯してたら撞かずの鐘になるって。わたくしも小さいころに聴いて覚えておりましたんでございまいすけれど、子細が知りたくなりましてねえ。だけどもこの文章では何故死んだのかもうひとつ納得がいきませんのよ。で、こちらにうかがったわけなんですの。あなたさまもそうですの」
「どうでしたか」
「全然違います。いいえ、大筋ではあっておりますのよ。だけど肝心なことが書いてございませんの」
冷たい風が二人をまくようにして吹き抜けていく。
「ご覧になって」と鈴木さんに促されね報恩寺の案内板の前に立った。

重要文化財　　報恩寺梵鐘　平安時代鋳造の名鐘

この鐘には「撞くなの鐘」或いは「撞かずの鐘」という悲しい伝説がある。
昔からこの付近一帯の織屋では朝夕に鳴る報恩寺の鐘の音が一日の仕事の始めと終わりの合図であった。ある織屋に仲の悪い丁稚と織女がいたが報恩寺の夕べの鐘がいくつ鳴るかについて賭をした。丁稚は八つといい、織女は九つと言い張った。
悪賢い丁稚は寺男に頼みこんで今夕だけは八つで止めて欲しい願いを約束させた。何も知らない人のよい寺男は簡単に引き受けてしまったのである。さて夕になり鐘は鳴り始めた。丁稚と織女は一つ二つと数え始めたが、どうしたことか鐘は八つで終わってしまった。

百八煩悩を除滅することを願って撞くので百八が基準であり、十二分の一の九つが正しいのである。集二分の一、六分の一、四分の一、二分の一等に分けて撞くこともある。
賭に負けた織女は悔しさ悲しさのあまり、鐘楼に首つり自殺するに及びその怨霊のたたりが鐘を撞くと不吉なことが生ずるので厚く供養して菩提を弔い、朝夕に鐘を撞くのを止め、除夜と寺の大法要にのみ撞くようになったというのである。
除夜に参詣の皆様には一つずつ撞いて戴いている近年である。
（報恩寺・梵鐘の案内文・原文のまま）

　微妙に違いますねというと、その言葉にとびつくように鈴木さんは、花村さん、どこが気になりましてとおっしゃる。やはり職子と職女の違いでしょうか。たとえ同じ職種を表しているにしても「子」と「女」では受ける印象からして全然違いますというと、うんうんと声こそお出しにならないけれど頷かれる。そうでございますの「女」であることを、公式テキストはその意味を薄めていますでしょ。たしか私が聴いて覚えている昔話でも職子でした。だから「女」であるということはとても大事なことでございますの。それにしても、と一度言葉をくぎられて、はバカでございのすねえとおっしゃるので、わず顔をまじまじと覗き込むように見てしまった。

　「わたくしがいちばんむっと来ましたのは『人のよい寺男』という表現ですの。そういうの『人がよい』といいますかしら。だって地域一帯の生活の大事な区切りの鐘でございましょう。どあほうの丁稚にそそのかされてほいほいのるのは共犯でございましてよ。かわいそうに」

　私には別な感覚がわき上がってきていた。何故そんなことで死ぬのだろうという「引っかかり」に今まで考えもしなかった「女」という言葉が割り込んできて動かない。

死を選ぶほどの絶望、それを私は屈辱という言葉にすりかえていて、黙りこくってしまっていた。「女性の屈辱」というと考えられることが一つしかなく、それを鈴木さんに語るなんてとんでもないことだと思えた。そういうふうに、すぐに言葉を結ぼうとする自分が馬鹿に思えた。まずそうとしか捉えられない自分に嫌気がした。鈴木さんは「共犯」という言葉を持ち出して織女が殺されたように言っているのに。

だけど私は、こんなたわいもないことでとしか言えなかった。
「こんなことでねえ」鈴木さんが言葉を取り合ってくれた。
「急に何もかもがいやになったんでしょうか。それとも憤死というべきか…。そこまで烈しい心の持ち主というべきか」
「いえいえ子供なんですよ。死ぬという実感がない。怖いもの見たさの延長で死んでしまったり、不遜なぐらい死を恐れないのです。花村さんはお子さんは？」
「いえ、おりません」
私は結婚生活を八年送り離婚した。原因は私の無頼な生活による。子供はいない。
「わたくしは五人を育てましたの」
鈴木さんの旦那さんが亡くなった時、すでに五人の子供たちはみな自立していて、ご夫婦は犬との生活を送られていたのだ。
「子供は愚かで、泣き虫で、嘘つきで、残酷なものでございますのよ」
「可愛らしく見えますが」
「そうそう、しかも本当に可愛いんですの。だから一生懸命、半人前のものを完成形に育てますのよ」

風が強くなった。境内にも墓地にも誰もいない。境内を区切った月極駐車場には車が数台駐まっており、ご住職のお宅もあるのだけれど人の影も声もない。風の唸る音ばかりが聞こえる。

こんなことも思った。
西陣の厳しい労働に、織女は心理的にも体力的にもぎりぎりのところで働いていたのではあるまいか。今様に言えば突っ張っていなければとてもではないけれどもたないような。「公式テキスト」の「伝説」によれば十三歳だという。子供とはいえ西陣の織子といえばこれから一家の大事な稼ぎ手になりうる存在であったろう。自負もあったのではないか。常に負けられないところにいたのではないか。だから悔しさが尋常ではなかった、と。
それを鈴木さんに述べてみた。
「それはそうかもしれませんけれど、どちらにしてもこんなことで命を棄てるのは愚かなことです。子供が黙るのは最大の反抗、自死するのは最大の抵抗…だとしても死んじゃいけません。わたくしはね」
鈴木さんがこちらに向き直った。
「『撞かずの鐘』の伝説を思いだして、あれには何か含むところがあるのかしらと思いましたの。ひょっとしたら悪戯ばかりする子供を戒めるための『伝説』なのかとも思いました。だけどこの鎧戸のように封印された鐘楼を見ていますと、たぶんほんとうにあったのでございましょうねえ。ごらんになって、わざわざ織女に一分の落ち度もなかったと但し書きするようなねんの入れよう。懸命に供養されたんでしょうねえ。しかも今も続いているんですね。…子供は愚かで無垢で可哀相。親の嘆きはたいへんなものだったでしょう」
「鐘を撞かないというのは、寺も町も恥いったのでしょうか」
「この案内によれば怨霊とありますね。恥ではなくて怖れでしょう。さあ花村さん冷え込んで参りましてよ。こんなところに立ち尽くしておりましたら風邪をひきます。参りましょう」
確かに「怖れ」であろう。まるで帷子のように板で囲いこまれた鐘楼をみると何かをけんめいに封じた跡のように思える。自然に手をあわせるかこうべを垂れるかせざるを得ない気が人の影も声もない境内に満ちてきたように思えた。

なむあみだぶつなむあみだぶつ

　冷え切った空からは雪が降り始めた。ぼくは自転車を押し鈴木さんと並んで帰路についた。
「今日はバスですねバス停まで参りましょう」
「私たちの聞きました鐘はどうやらxx寺のようですよ」
「ははあするとあれは悪戯ですね」
　横を歩く鈴木さんを見た。首に金色の細い紐がかけられていてそれがコートのポケットの中へと続いている。たぶん老人無料乗車証をパス入れに入れておられるのだろうと思った。これなら忘れないだろう。
　雪が烈しくなり東から西へぬける寺ノ内通り南側の、先日降ってまだ融けていない雪の上に新しい粉をふりかけたように積もり始めていた。鈴木さんはお構いなしに雪の上を歩いていく。私は自転車を滑らすまいとうつむいて歩いていた。隣を歩く影が雪に滑ったのか、ぼくの腕を掴んだ。金の紐が光ったように思えた。
　鈴木さん大丈夫ですかと顔をあげると誰もいなかった。
　鈴木さんが雪の向こうの、堀川通りの交叉点に立ってぼくをじっと見つめていた。
（了）

芥子色

「台風は今夜半過ぎに近畿地方にもっとも接近するでしょう」
目を覚ました桂子は、カーテン越しの淡い光を見たとたん、昨晩のニュースの声を思いだしていた。なんだか一晩中、頭の中でなっていたような気分で。
すぐにカーテンを開け放つと、様々な灰色の雲が層になり、うねりながら空を斜めに横断していくところだった。
たしかに台風は夜のうちに通過していったようだけれど、梅雨前線は連れて行かなかったみたい、と桂子はおもう。期待していた青空は片隅にもなかった。

今日は祇園祭の宵山。ベッドの横にはきちんとたたまれた浴衣と帯がそろえてある。
顔を洗い、シャワーを浴びてから台所に立ち、ミルクを沸かし紅茶を淹れる。
トマトを切り、ベーグルをお皿に載せ、ミルクティーと一緒に簡単な朝食。

食べながら窓の外を見る。相変わらず灰色の竜がのたうっている。
今日は仕事が休みだから、夜までにはたっぷりとと時間がある。
食事を終え、掃除を始める。
両親が残してくれた小さいけれどもかけがえのない家を、桂子は、すみからすみまできちんと掃除する。
普段は二階の自分の部屋だけを主に使うけれど、他の部屋にも「荒れた」雰囲気を絶対につくりたくないので、ほとんど使わない一階の部屋もすみずみまでまできちんと雑巾がけをする。毎週、日曜日の午前中はその作業だ。
昼前に掃除が終わる。
一階の台所でカルピスをミルクで割り、それをもって二階に上がる。

パソコンのスイッチを入れる。フォルダをあけてメールを読む。
『浴衣着るって？いいやん。見たいなあ』
その次
『宵山だね。帯の色、芥子色にした？紺にはよくあうよ』
その次
『うーん、どうしても仕事で帰れないよ。残念』
送信元はぜんぶ「ジュンイチ」である。
パソコンのおかれた机には郵便物が積まれている。すべてジュンイチからの手紙である。
國本潤一からの手紙は毎週必ず来る。それ以外にもメールで毎日やりとりしている。
その一通をあけて、桂子は読み直す。
これまでも手紙で潤一は、何度か逢いたい、と書いてきた。そして、次の週には決まって仕事か家の都合で京都に行けないと、書いてくるのだった。
桂子はそのたびに溜息をついては、ケータイからメールを打つ。
残念でした。だけど必ずいつかあいたいね、と。
今回もそうだ。
桂子はずっと独りだった。大学を卒業し、就職。程なく、父、そして母と相次いで亡くなった。それからずっと独りである。
子供の頃から友人も少なく、仕事を始めてからはまったくいなかった。
「ジュンイチ」と「知りあった」のは昨年のことだ。初めてのボーイフレンド。

桂子のパソコンのメーラーには「ジュンイチ」というフォルダと「ケイコ」というフォルダがある。

　メールは同じ人間が打っている。
　手紙も同様だ。「國本潤一」からの手紙はすべて桂子の字で書かれていた。

　「自分宛の手紙」。
　この考えはある年の祇園祭の宵々々山に思いついた。ほんとうにまったくの思いつきなのだけれど、
「宵山にいきませんか」という手紙かはがきを貰ったら自分がどんな気持になるのか、自分で自分自身を知りたかったのである。
　歩いて数百メートルのポストに投函するときは、どきどきした。そんな気持は初めてだったけれど、着いたとき、わくわくしながら封を切る自分の姿にも驚いた。
驚いたけれども、それからやめられなくなった。

「國本潤一」という男を創りだし、手紙を自分宛に書き出した。おかしいのはわかっている。だけど、その手紙に、着いた瞬間だけれど心が揺れているのも本当なのだ。

「ジュンイチが京都に来るまで、浴衣姿は 封印しようとおもいます」

　送信。
　すぐに着信。。

　手紙はすべて封書で、消印はすべて京都・仁王門。そして桂子は、その横に積んである「國本潤一」に書いた手紙をいちども投函したことがない。

　夕方、雨が今にも降り出しそうだけれど、なんとか天気はもっている。桂子の住んでいる東山仁王門付近は鉾町には遠いけれど、歩こうと思えば歩ける距離である。
　浴衣をみつめて、桂子はたちあがった。着ることはない。片づけよう。

　携帯電話がなった。勤務先の一年後輩、田中からである　桂子と同じ営業部にいたので、普段から、よく会話をかわしていた。屈託のない人だな、と桂子は感じていた。
「もしもし」
「朝霞さん、今日、どうしてはります？」
「え、宵山に行こうかとおもてんねんけど」
「あ、やっぱり。よかったらぼくといきません？」
「え」
「すみません、突然」
「あの、私、人と待ち合わせが…」
　なにげなく顔をふった先に、芥子色の博多帯があった。その下には紺地に桔梗柄の浴衣。
　…綺麗…と思った。
　瞬間、「ジュンイチ」が消えた。
「あ、いや、それならいいんです。突然なので。失礼しました。すみません」
「え？いや、ううん。ありがとう。うん、一緒にいこ」
「うわ」
「ところで田中君、浴衣？」

六時に三条大橋西詰めで待ち合わせた。群青色の空の下、橋上の人混みを、腰に団扇を差し白絣の浴衣を着た田中が少しはにかみながらまっすぐに桂子に向かってくる。
「わかった？」
「その芥子色、すぐにわかりました」
ふたりは歩き出した。いつのまにか指を繋いで。

祇園祭の山鉾巡行が終わってすぐに梅雨が明けた。途端に蝉が鳴き出し、街路樹は一日中賑やかである。
土曜日の昼下がり、朝霞桂子は職場の後輩、田中敬吾の家に向かって北大路通りを歩いていた。
薄い小豆色のサマードレスに風が柔らかな皺をつくり、同じ色のサンダルが高い音をだしている。白い日傘で陽を遮り、陰の中に白い顔があった。

前の週の宵山の日、桂子は敬吾から思いもかけず誘われ、いっしょに四条通をそぞろ歩いたのだった。そこを歩く何万人かと同じく、祇園囃子の拍子に身も心も共鳴箱のようになってしまい、ゆらゆら、ゆらゆらと歩いた。
ちまきを買い、紙コップでビールを飲んだ。帰りには新京極で寿司を食べ、浴衣姿のまま鴨川の河原を歩いた。　最初は指を繋いでいたのが、やがて手を繋ぎ、最後は腕を組んで歩いていた。

桂子は何度も「何故わたしなの？」と敬吾に聴いた。そのたびに敬吾は「最初にあったときからなんだか」とか「つまり一目惚れってやつ」などと答えていた。
けれど、照れているのか敬吾の語尾がはっきりしないことを桂子は許さず、「好きなら好きといいなさい」とそのたびに追い打ちをかけた。
敬吾が、問われてからではなく、自分から「好きです」とはっきり言ったのは鴨川の涼風の中でだった。桂子は、自分の体の中の何かが瞬間に変わった気がした。
そして、ありがとう、といいながら腕をしっかり絡めたのだった。

あの日からもうすぐ十日になる。仕事場では相変わらずの日々。しかし夕食は二人で食べることが増えた。たまたま今月は北野の天神さんの月例の縁日が日曜日だったので、一緒にでかけることにしたのだった。
桂子は、大学生の頃には割と来たことがあって、古道具屋を冷やかして歩いたものだった。働きだしてからは、仕事の忙しさにかまけて縁日のあることさえ忘れていたくらいだった。
敬吾は露店の雑多な雰囲気が好きで、毎月覗いていた。二十五日が平日のときでも仕事のあと、六時ぐらいには訪れるようにしていた。その時間だと、すでに神社の西側に陣取っている園芸店や植木屋たちの露店の多くは店じまいをしていて、ほかにも片づけだしている露店も多い。だから敬吾は広い境内を気忙しくまわるのだけれど、古着屋、古道具、屋台の食べ物屋などではまだまだ元気な声が飛び交っていて、それだけで敬吾は浮き立つような気分になるのだった。

北大路は大徳寺の前で坂になっていく。
桂子は大徳寺の壁に沿ってゆっくりと北大路を上り始めた。右手の大徳寺の塀の向こうは緑が溢れ、左手からは街路樹が明るい緑の葉で日陰をつくってくれていた。
敬吾の部屋に行くのは初めてである。自分ことを好きだといってくれるのは嬉しいけれど、きちんとどんな人なのか見ておかないと、とおもう。
桂子は敬吾のことをもっと知りたかった。ふたりとも二十五歳を過ぎているのだから、子供のようなつきあいではありえない。
誰だって厭な男性と肌を触れあいたくない。いくら言葉で好意を告げられてもそれとこれとは別である。魅かれたい、と願う自分を醒めた目で見る自分もまた、いたのである。

桂子の目の中に真っ白な花がはいってきた。おもわず目を凝らす。
街路樹は整然とした間隔で歩道の端に植えられているのだけれど、その間の露出した地面には街の人たちが好きな草花を植えていた。本当はいけないのだろうけれど、管理する側は黙認しているようである。
そういえば来る道すがら、朝顔やマリーゴールドなど、様々な花があった。今、目に飛び込んできた花は細い小さな木に咲いていた。それが大徳寺の壁の終わりあたりからどの街路樹の根元にもあった。距離でいえば二十メートルぐらいだろうか。あまりの白さに桂子は立ち止まって花の正面に立ってみた。木槿（むくげ）だった。次の木の下は薄い紫に桃を溶かしたような色の花、次はまた白と続いていた。
誰かが植えたんだろう。誰が世話を続けているのだろう。桂子は顔の見えない誰かの手があるのを感じていた。
また、大徳寺の近所に咲いていることに縁を感じた。
桂子は両親が健在だったころ、お茶を習っていた。その時、花器に飾られる夏の花に木槿が必ずあったのだ。
先生から、白くて花の真ん中の底がくれない色になっているのが千宗旦ごのみの宗旦槿というのだと教えてもらっていた。

大徳寺といえば門に千利休像を置いたがために、秀吉による利休追放、そして切腹のきっかけとなったところである。その傍らの道端に、夏のお茶席にかかせない木槿の木が植えられている。
（植えた人はそんなことも知っていたのかしら）と桂子はおもう。

また、お茶の先生はこんな話もしてくれた。
有名な、利休による秀吉のための「朝顔の茶会」という話がある。
朝顔の花を丹精込めてたくさんつくった庭のある庵で、秀吉を招いての茶会を催したのだけれど、茶室の一輪の朝顔を除いて他の花を全部摘み取ってしまったという話である。
ところが「あさがお」というのは江戸時代の頃までは木槿のことをいっていたらしいのです、と先生はおっしゃっていた。そのもっと昔、平安の頃は「あさがお」といえば桔梗のことだった、とも。
木槿はいつ頃から日本にきたのだろう。木槿、すなわち無窮花（ムグンファ）は韓国の国花である。

木槿のある街路樹を過ぎてすぐに交差点があり、そこを渡ったところが敬吾の住んでいるアパートである。彼の実家は、ここから南へいった船岡山の南側、西陣の真ん中にある。
何せ狭いし、と敬吾はいっていた。三人兄妹で、家には織機も置いてあり、働きだしてすぐにアパートを借りたのだという。
二階の２０７号室をめざした。階段を上がりながら、サマードレスの丈が少し短かったかしら、とおもう。
敬吾はにっこり笑って迎え入れてくれた。暑かったでしょ、といいながらアイスティーをすすめる。敬吾はまだ、年上に対するしゃべり方を崩していない。崩れかけているけれど、同輩にしゃべるようにはしなかった。
いつか変わっていくんだろうな、と桂子はおもう。

１Ｋの部屋で、壁側にはぎっしりと本とＣＤがある。あとはベッドとテーブル。テーブルの上にはパソコン。逆の壁側には小さいけれど便利そうなウォークインクローゼットがあって、服や細々としたものは全部その中にあるようである。
溜まってくると実家に持っていくから、あまりモノがないでしょ、という。

窓辺には机。桂子はその前の椅子にすわり、敬吾はベッドに腰を下ろした。
桂子は今来た道にあった木槿の話をした。あ、あれはね、と敬吾が答えた。
「近所のお婆さんが毎朝、お水やってます」
「たいへんねあれだけたくさん世話しなけりゃいけないんだもの」
「そう…でも強いみたいですよ木槿って。水やり以外はあまり世話しているところみませんから」
「わかんないわよ。昼間はあなたは仕事していて見てないでしょ」

「まあそうですけど」
「でもほんとに真っ白ね」
「ほんとに」
　敬吾は立ち上がって桂子の肩越しに眼下の北大路をみつめた。

　お茶を飲み終え、二人は天神さんに向かった。距離はかなりあるけれど、バスに乗らずに散歩しながらいくことにした。東鞍馬口通りから千本へ。千本を下がらずに西陣の中の細い路地を縫うようにして歩いた。やがて北野天満宮の北東の角に出た。　天神さんのぐるりの道路がすべて露店で埋まっている。これに本殿以外の境内と参道にも露店が出ている。

　敬吾はいつも見にいく古道具の露店に桂子を連れて行った。大工道具、金属の加工道具などの中古品がずらりと道に並んでいる。
「こういうのが好きなのね」
「ええ。ほらよく使い込んでいて手入れもキチンとされているでしょう。あのノミとか金槌とか…使っていた人の手が見えるようでしょう」

「見えない手が見える」という感覚が桂子につたわってきた。
ついさっき、自分も木槿の花の前で感じたことだ。弱い枝を剪定したあとがあったし、一輪挿しにも使っているのが分かるような切り口もあった。
「切れそうな剪定ばさみなんてあるかしら…」
「ほらあそこに」
　中古の鉄の剪定ばさみが鋭く研がれていくつか置いてある。桂子はその一つを衝動的にほしくなった。

　古道具屋から南下して大鳥居から神社の西側に出る。敬吾があまりこないという園芸店の露店が集中していた。ここももちろん多くの人でごった返していた。
　椿、萩、金木犀…樹もたくさん売っている。花をつけた木槿の苗木もあった。
「あ、白い木槿」
「ほんまですね…あの木と一緒かな」
　すかさず園芸屋の主人が声をかけてきた。
「はいはいはい、むくげ、ね。夏のお茶席には欠かせない花！！ね、一日花だから、今日の花はこれで散っちゃうの。おしまい。ほらもう全部しぼんでるでしょ」
「え、木槿って一日花なんですか」
「そう。だけどほら」
　といって主人は木の枝を指さした。次の蕾がたくさん膨らんでいる。
「次から次と咲いては散り、咲いては散りとしていくの」
　木に札がついていて、名前が書いてある。
　『祇園守』。
「これ『祇園守』っていうんですか」
「真っ白の木槿で、八重に近い花を祇園祭の頃に咲かせるのを『祇園守』っていうの」

　夕暮れに、二人は敬吾の部屋に戻っていた。結局、敬吾は何も買わず、桂子は鉢植えの「祇園守」と中古の剪定ばさみを買った。
　洗面所で手と顔を洗った。敬吾はこれから桂子の部屋まで送ってくれる。それから二人で食事に行く予定。
　それからどうなるかわからない。ついさっきもキスをしたばかりだ。

もう「お守り」を手に入れた気でいる自分を、苦笑いしてみつめている自分もいる桂子なのだった。
（了）

●木槿はは夏には貴重な茶花である。白く真ん中の底紅が美しい花は、千宗旦が好んだので宗旦槿という。半八重で白い木槿でしべの深いものを京都・祇園祭にちなんで祇園守という。　アサガオの名は古くは桔梗であって、後に木槿、今は朝顔に変わってきている。
　秋の七草の古歌に
「はぎおばな　くずなでしこ　おみなえし　ふじばかままた　あさがおのはな」　　とある。
この時のあさがおは、桔梗をさしている。木槿が何時ごろ日本に入ってきたか、また自生していたかどうかははっきりしない。
　また、千利休が秀吉のために催した茶会に有名な「朝顔の茶会」がある。ただ一輪の朝顔の花を残して庭の朝顔をすべて摘んでしまったのである。定かではないが、このころ鉢植えの朝顔は「つる朝顔」と呼ばれ、このときの朝顔は木槿だったという説がある。

雨はれて心すがしくなりにけり窓より見ゆる白木槿(しろむくげ)のはな

●韓国の呼び方「無窮花（ムグンファ）」または「ムキュウゲ」が変化して「むくげ」となったともいわれる。韓国では 国の繁栄を意味する花として国花になっている。
●朝方３時頃に開花した花は夕方にはしぼんで しまう「一日花」で「槿花一朝（きんかいっちょう）の夢」（人の世ははかない、の意）に例えられているが、 次々に別の花が咲くため長く咲くように見える。

蛍

　六月。夏至前の夕暮れは深い群青からゆっくりと闇の帳が降りていくものだから、彼は、さっきから神経質そうに覗き込んでいる腕時計の時間と目に入る風景の光度にずれを感じていた。
　彼が歩いている龍安寺商店街を行く人たちの影が、なかなか闇に溶けていかないのだ。
　仕事を終え、電車から降りて家へ帰ろうと歩きはじめてすぐ、彼の脳裏に、朝、同じ路地に住むおばさんから聴いた蛍のことが思い出されていた。彼は何度も何度も腕時計を覗き込んでいた。時計を見るよりも、ゆっくりと闇を見渡していればよかったのだけれど、腕時計をのぞき込むのは癖になっていた。　蛍のあかりが見られるかどうか、人の時間を当てはめてもしかたのないことなのに。

　彼がこの町に住んで１２年になる。以前住んでいた町では、梅雨直前の暑い日が続く頃、 蛍が舞う小川があった。
　その時は冴子と一緒に暮らしていて、一緒に蛍を見た。
　驚くほどたくさんの蛍が飛んでいて、ふたりで興奮していたな、と彼は思い出す。
　それからあの夜、何人かの家族連れが捕虫網と虫かごを持って蛍を捕っているのを見とがめて、冴子がめずらしく怒ったことも思い出す。
　「そんなに捕ったって家の帰る頃には死んでるんだから。よしなさいよ」
　子供が、えっ、という顔をし、てらてらと日に焼けた顔をした父親と、歩くのも大儀そうな母親が、薄ら笑いを浮かべて、顎を冴子に向けて突き出した。

　あの顎をぼくは殴るべきだったんだろうか、不意に彼はそう思う。
　やめなさいよ、となおもいう冴子に、
　うるせえなあ、てめえなにさまなんだ、とつっかかる父親に向かって彼は、睨み返すことしかしなかった。
　あたりの雰囲気はみな冴子の側についていたから、父親はちぇっ、と呟き唾を吐くと、一家を四駆の大排気量の車に乗り込ませるや、急発進で去っていった。
　虫かごは蛍でいっぱいだった。
　気がつくと彼は冴子の二の腕を掴んでいた。まちなさい、といって車の前にでも飛び出るような人だったから。

　彼は一人だけの夕食の準備をしている。いつのまにか心は冴子のことでいっぱいになっているのだけれど、それではスパゲテイのゆでている時間を忘れるから、料理に集中しようとした。

　悔しい、と冴子は言った。悔しいじゃないの、あんなこと許しちゃだめよ、と言った。

…うん、たしかにそういったな、と、ペペロンチーノを仕あげながら 彼はとうとう独り言を呟いた。
…そのあと蛍を見て、うん、
　少し涙ぐんでさえいた冴子も、しだいにほのかな明かりの乱舞に見とれだし、溜息をついて感心していた。

そこで記憶は止まる。
彼はそれから数年後に一人になった。

「あんた、ようマメに面倒見はるね」
午前六時、小さな家が向かい合う路地の、真ん中付近に彼の住まいがある。玄関前に栽培しているミニバラの六つの鉢に水やりをしていると、二軒隣のやはり玄関の前で様々な植栽をしている老婦人が声をかけた。彼女は独居老人である。
彼がミニバラを栽培しはじめたのは偶然である。そんな趣味はなかったのだけれど、いざ手に入れると、小さな命の世話に時間をきっちりと割くようになった。

「綺麗に咲いてるやんか」
六つの鉢は一番花が次々と咲いていた。彼は黙って頷く。近所で彼に声をかけるのはこの老婦人だけだった。
「もう六月やなあ。今年は暑なるらしいよ。そや、哲学の道では蛍がぎょうさん飛んでるて、夕刊に出てたよ。あんた夕刊読むのん…あ、読まへんの…ふーんふーん…あの、このへんでも蛍が見られるの、知ったはる？」
「いや知りません」
彼が老婦人に話しかけられるのは初めてではない。それはたいてい同じ台詞である。
…キレイニサカサハンナ…或いは…マメニメンドウミハンナア…
彼が、だからそれ以外の言葉に反応したのかもしれない。それともやはり冴子と暮らした時期をふいに思いだしたからかもしれない。
「どこです」
彼が老婦人に対して、そんな言葉を口にするのも初めてのことだった。
食事を済ませると、彼は窓越しにひろがる夜の闇を確かめ、ゆっくりと立ち上がり、草履ばきで家を出ると、龍安寺商店街をゆっくりと南下した。
踏切を渡り東へ。やがて線路に沿った狭い用水路が現れる。用水路と線路の間の堤は桜並木がつづいていて、葉桜の下は闇がさらに濃い。
商店街を歩きながら、彼は半信半疑になっていた。このあたりは「哲学の道」付近の疎水とか、三条の「白川沿い」のように、蛍や水鳥で知られているわけではない。ましてマスコミに報道されるような、特記すべき美化活動など何もしていないところである。
ただただ静かな下町なのだ。

あの繊細な虫がここを飛ぶのだろうか。闇に沈んだ用水路を見てそんな気分に襲われた。用水路沿いの私道は未舗装のまま荒れるに任せており、大きな水溜まりが轍に沿っていくつもある。用水路との縁と、そこから２メートルぐらいのところには柵がめぐらされ、塗装された黄色いペンキがかなり剥げ落ちていた。柵と柵の間が人の歩く道、と想定しているようなのだが、膝のあたりまで雑草が生い茂っている。

踏切脇の、保線用の小さな倉庫の脇から用水路は始まっている。そこまでは衣笠山、龍安寺山などの小さな山からの沢水が流れてきていて、線路の下をくぐって直角に曲がり、東へ流れていくのだ。
用水路はコンクリートの箱ではあるけれど、水は綺麗である。生活用水が流れ込んではいない。上流からの山土が積もり、ちいさな淵や「島」ができている。蛍が棲むとしたらそこだろう。

私道の反対側はコンクリートの塀が延々と続いていた。塀の裏は高校のグランドである。この道は高校の持ち物なのだ。用水路の向こうに続く町の人たちへの便宜を図って、開放されている道である。塀の向こうから野球部の練習す

る声が響いてくる。ナイター練習の照明の余波もこちらにも響いていた。その薄明かりの中、彼は柵を乗り越え雑草を踏みしだいて用水路を覗き込んだ。
　真っ暗である。

　私道の先で子供とお婆さんの声がする。子供は男の子だ。もしその子がいなくてお婆さん一人が荒れた草地に佇んでいたのなら、彼でなくともぎくりとしただろう。子供がぴょんぴょんと飛び跳ねている。
　涼みに歩いているのだろうか、彼は思う。
　茫々とした雑草の帯のこちらとあちらでお互いを確認した。
「蛍…ですか」とお婆さんがいう。
「ええ」
「いませんねえ。そちらは見えますか」
「いえ」
「ぼくはみたもん。ぎょうさんおったんやもん」と男の子が言う。
　彼はいったん柵から道へ出て、二人へ歩み寄った。

　線路の向こう側は、電車を下車した勤め帰りの人たちが家をめざして次々と歩き去っていく。
　思いもかけず自分と同じ、蛍を探している人がいたのだが、やはり蛍はいないのだ、路地の老婦人がいっていたのは、もっともっと昔の話なのだ、と彼の心は静かになっていった。
「去年はねえ、たくさん飛んでいたんですよ」
「そうなんですか」
「見たもん、ぼく、ぎょうさん見たもん」
「まだ早いのかしらねえ。知りあいが疎水の蛍が乱舞してたよ、いうてねえ。ほなそろそろうちのあたりも…て、おもたんやけど全然ですねえ」
「毎年ここに蛍が飛んでたんですか」
「ぼくは見たんやもん」

　彼の知らないことであった。仕事場の印刷会社と路地にある小さな家との往復以外に、家から出ることもなく、町がどんな様子なのかほとんど知らなかった。鉢植えのミニバラの世話以外に、路地に出ることもなかった。十二年間ほとんど。
　例えば３年前なら、彼はどうしただろう。いや、おそらく路地に住む老婦人も彼に声をかけただろうか。本人には分からない、仕草や目つきが人を寄せ付けないことがある。
　そんな病に彼は長い間苦しんできた。

　今や、彼は長いアルコール依存の戦いの主導権を握っていた。糖尿病がそうであるように、アルコール依存という病も、一度罹ったら一生が戦いなのである。風邪や外傷や腹痛とは違う。ひとたび原因物質が体内に取り込まれると即座に、たぶん今なら劇症として発病する。「完全治癒」というのはあり得ないのだ。
　酒を完全に止めて十二年。つきあう人間がすべて変わった。精神の発作も暴力も消え失せた。
　仕草や目つきが変わった。人間が変わったといっても大袈裟ではあるまい。
　しかしそうなる前に冴子を失った。
　彼は別れる前の冴子のまっしろな絶望しきった顔を覚えている。それが最後だった。

「むこうならあるかもしれませんね」
　お婆さんがそういいながら流れに沿って歩き出した。
「あるといいですね」
「あるって。ぼくは見たんやから」

「ふふふ、この子と去年見たものだから…」

　私道は野球のグランドと用水路の間を曲がりながら南へ向かって続いていた。水溜まりと雑草はますますひどくなってゆく。もう男の子が用水路の淵をのぞき込めないほどだった。その行き止まりの橋の上から三人並んで、流れをずっと見渡した。光はない。
　真下をのぞき込むと、用水路はかなり深くなっている。この先、さらに東から来る用水路と合流するようだ。
　彼がふと気がつくとお婆さんと男の子は、愉しそうにさらに家の混み合った町の中へと、手をつないで歩いていく。この先を右へ曲がれば急な谷になっていて、そこに東から来る用水路を渡る橋がある。そこだけはずいぶん賑やかな下町の食堂街の声が坂の向こうから下りてくる。たしかに場所に不釣り合いなほど、水は綺麗だが。果たして…。

　酒を止めることで失ったものはたくさんある。しかし、酒を飲むことで失ったものに比べれば、まったく無傷といってもいいぐらいだ。
　彼は周りを傷だらけにしたことを素面の中で延々と認識し続けたけれど、自らも傷だらけであることにはあまり気がついていない。
　それでも飲まないことがすべてであることにかわりない。
　酒無くしてなんの人生だ、何が愉しくて生きているんだ、という「罵倒」にも笑顔を返せるようになった。
　彼はようやく「勝ち」だしているのだ。

　小さな狭い橋である。橋から坂を上るとバス停がある。勤め人や学生が帰っていく。
　背の低い欄干につかまり男の子と遠くを見透かしてみた。用水路の中にある小さな「島」に繁っている草むらのあたりを見た。
右手…ない。
左手…ない。
「ふうーっ、駄目かな」と彼がいったとき、右側の草むらで、ほんわりと、あの灯りがともった。ともって点滅した。
「あ、いましたね」お婆さんに振り返っていう。男の子が息をのんで指をさす。
「あそこあそこ」
「あ、ほんまやわ。よかったなあケン君、今年も見られて」
「だからゆうたやんか。ぼくは見た、って」
　お婆さんが左側を見る。
「あ、あそこにも」
　急いで左側につくと、点滅しながら横にゆるゆると蛍が飛んでいく。
　彼は頭の辺りが熱くなってきた。横では男の子が、欄干に乗り出してみている。
「とんでますか」
まったく知らない女性の声が背後で聞こえた。
「ええ、ほらあそこに」彼は振り返らずに指さす。
「一昨年はもっと飛んでたんやけどな」男性の声もする。
「あ、ほんまやほんまや」また別の女性の声。
　彼が振り返ると、大勢の通勤帰りの人たちが彼の顔を見返した。みんな目が輝いている。彼はその「目」にむかって思わず肯いた。橋の上はいつのまにか知らないもの同士でいっぱいになっていたのだった。

お婆さんと男の子はもう少しこの用水路を辿っていくという。彼はここで帰ることにした。こめかみあたりがずっと熱い。

場所を他の人に譲りながら、彼は失った何かが帰ってきた、と感じていた。それが何であるかはわからない。ただ心の中に懐かしい気持が湧き起こってきたのだった。

彼はいつもやるように腕を回し、手首に視線を落とした。

腕時計を嵌めていなかった。

（了）

献

　犬が倒れてから四日が過ぎた。これで倒れたのは三度目になる。十三歳を過ぎてから、ほぼ半年おきに繰り返している。
　いずれも突然立てなくなる。立った状態から後ろ脚が崩れるようにたたまれていくのである。犬は立とうと抵抗するのだけれど、足が脳の指令を聴かない。獣医の診断は「脳卒中」である。脳出血なのか脳梗塞なのかはわからない。獣医は「中枢がやられています」という言い方もした。

　初の発作の時は、点滴と注射でその日のうちに自力で歩いていた。
　二度目の発作は強烈だった。瞬きが止まらず、眼球の回転が止まらなかった。そして立てなかった。時々、体をよじってでも起きようとはするのだけれど。
抱きかかえ外に出して排泄をさせていた。そして二週間続けて獣医へ通い、毎日強い薬を注射して貰ったのだった。
　今回はその必要はなかったけれど、五日間の獣医通いと二日分の経口薬が必要だった。

　時々ふらつくけれども、とにかく歩けるようになった。少しずつ食欲も出始めた。最悪の状態は脱したようである。そして落ち着いてみると、犬が以前と比べて静かになったことに気がついた。
　吠えないだけでなく動作が少ないのである。
　もう一つ気がついたことがある。犬がいつも私を見ているようになったのだ。なんとはなしに犬のほうを見るたびに、こちらを見ている視線に出会う。
　そのたびに、ますます分かちがたい関係になったな、と繰り返し感じている。
　分かちがたい？…文字通りである。
　残り少ない時間をなるべく一緒にいようとおもうのだ。

　日曜日の午後。
　光は東の窓から葉影をつれて入ってくる。十四年前、その窓の外に駐まっている車の下で、生後約一ヶ月の犬は発見されたのだった。
　見つけたのは登校途上の小学生。犬は懸命になき声をあげていたのだ。

　胸の中にその小さな体を抱きとめてから、私の生活は大きく変わった。大袈裟でなく、「人生の同伴者」が出来たのだから当然ではあるが。

　犬と過ごしてきた時間をおもう。

　家が仕事場だから、いつでも触れることが出来たのはよかったかもしれない。健康状態のチェックはすぐにできたし、寂しい思いをさせることもなかった。しかし、夜遅くまでの作業の時などは、結局、寝ているようでいて浅い眠りであったろうし、仕事上のトラブルなどに歯ぎしりをしているときも横にいた。私のうめき声や悪態を聴かされてきたのだ。

わたしが犬の寿命を縮めたのではないか。そのことをいつも思う。
同じような生活の履歴から、犬は「戦友」だ、といった人がいた。私にそういえるだろうか。家族だとは、はっきりいえるけれども…。

犬がゆらゆらと歩いていく。正対して水が飲めない。首を左に傾げ、体をゆるい「く」の字にしたまま水を飲み、フードを食べる。倒れないように体に手を添える。

夕刻。
南側のスリットから光が差してきて、犬の体を包んだ。
見ていると犬がこちらに視線を向けた。

そうだったのだ。
犬がこちらを見るようになったのではなくて、私がいつも犬を捜していたのだ。
犬はいつも横にいてくれたのだ。
支えられてきたのは私だった。すがろうとしているのは私であった。
生きてくれ、もっと、一緒にいてくれ、と願うのは私だった。
犬を包む光が私の足まで届いていた。

（了）

Blackbird

　背後で雨が強く降る私は机に向かいあなたを待っていたのだろうか
枇杷の葉を打つ音が大きくなるたびに　あなたの髪は濡れ
小さくなるとあなたの黒い靴は軒先から踏み出された
　やがてblackbirdが啼いた
雨が上がり　窓に小さな顔が浮かんでいる　何年も前のあなたの顔
かたわらにその時の私の顔　　長方形から融けだして

藍の手

　その坂は丘の頂上近くで強い光を浴びていた。風が吹き吹き抜けていて、頂上には目印のように臙脂色の花をつけた立葵が揺れている。
上っていく左側の一軒の家の窓から藍色の布がちろりとはみ出ているように見えた。
そこが友人、守屋の新しいアトリエである。

　その家はもともと箏の弦を作る職人の家だった。
　昔ながらの、絹糸をよりあわせた弦をつくる工房であったから、奥行きが十五メートルほどの細長い部屋が坂に沿った壁の横にあった。
　部屋の両端に人が立ち、強く引きあいながら長い弦を締めるのである。
　そのような特殊な部屋がついているので、職人が亡くなり空き家になってからは、なかなか借り手がいなかった。敷地そのものも狭く細長いので、取り壊して何か新しい建物を建てるにも手間がかかりそうなので、ほとんど放置されていたのだと、守屋は不動産屋から説明をうけたという。
　家賃が安いというのが彼が借りた最大の理由であるけれども、彼は日本画家であって、大きな号数の画の制作のためにアトリエとして借りたのである。
　件の細長い部屋がちょうどよいと彼は判断したのだ。

　訪ねてみると守屋は細長い部屋で画の制作をはじめていた。
「こんな細長い部屋だから、一休さんみたいなことでもするのかと思ったよ」
　と言うと
「おもしろいかもね。題名は『ひとふでがき』だな」
 と、守屋は笑った。
　長い壁には窓がいくつかあって、守屋はそこに藍色の布を掛けていた。
「これがさ、外にはためいていくことがあるんだよ」
「うん」
　守屋は体がクーラーにあわないので、冷房としては扇風機を回すだけで、たいてい窓を開け放していた。日よけのために窓には藍色の布を掛けていて、その隙間から風が入ってきていた。
「時々、これを引っ張る人がいるんだ」
「子供かな」
「…とおもうんだけれどわかんない」
「もってっちゃうの？」
「いや、引っ張って暖簾の竿がはずれてしまうんだ」。
　窓辺では床から２メートルくらいの高さにフックが打ちこまれ、そこに竹竿が何本か載せられていた。そしてそこに床すれすれの長さの藍色の布が数枚、暖簾と同じ要領で竹竿に通されていた。窓と暖簾のあいだには数センチの隙間がある。
「それは困ったね」
「窓をふさいじゃおうとも思うんだけど、暑いしなあ」
「いたずらか」

「たぶんね。何度もやられるとまいっちゃうよ」
　二人で一緒に外へ出てみた。
　夏なので太陽の軌道はずいぶん北に寄り、藍の布も家の影の中に入っていた。玄関から回り込むと壁の影が動いているように一瞬、見えた。
　黒の中の藍である。影の中に影があるような雰囲気なのだ。
　おもわず近づいて影の中を見た。窓辺で藍の布が、外の風と扇風機の風とのあいだで、膨らんだりへこんだりしている。呼吸しているみたいだ。
　自然と手が出た。
「守屋、これは子供なら触りたくもなるぞ」
「そうか」
　藍の布が膨らんできたので、触れてみた。すると瞬間、布が手の形をして私の手を握り、中へぐいっとひっぱった。
　慌てふりほどこうとすると、「藍の手」がぱっと私の手を離した。
　家の中に竹竿が転がる音がした。
「どうした」
　守屋がうしろから覗き込んでいる。ぶーん　ぶーん　ぶーん、と窓の中で音がする。

（了）

路地

つぎはぎ舗装
の路地に水道
工事で新しい
長方形が載る
道端に真っ赤
な石榴が割れ
犬と猫の足跡
電線のカァブ
も載っている
道端から見る
とクレーの絵
のようで雨に
溶け陽に焦げ
風に研がれて
路地は滑らか
な画布になる
街は生きてい
るから壊れる
人のように手
を当てて生き
ていく路地に
支えられて路
地の上を人は

透明な翅

　子供たちが、自分たちと同じく、あるいはそれ以上に、町を徘徊する老人の存在に気がついたのは、夏休みが八月に入ってすぐのことだった。
　彼らは小学校二年生の三人組。住んでいるのは、ぐるりを山に囲まれた街の北端だった。
　連日、午前十時には集合し、山の裾野にあたる自分たちの町内で蝉を追っていた。
　全員が帽子に半ズボン。捕虫網を手に持ち、虫かごをたすき掛けにし、その目は真剣そのものだった。目指すはクマゼミである。同級生でいちはやく捕獲した者がいたから、負けてはいられないのだ。
　枇杷や松の、手が届くところに留まっているような小ゼミは捕獲したところで何の自慢にもならない。高いところに止まっていてなかなか捕虫網にかからないクマゼミこそ、捕る値打ちがあった。

　執念の追跡は続いたがクマゼミは捕まらなかった。その日も収穫がなく、焦りが諦めに変わる頃、一人が確かめるように他の二人に声をかけた。
「あのおじいさん、毎日、歩いてへんか」
　他の二人は黙って肯いた。

　ほーほーほいっ
　ほーほーほいっ

　町中のどこにいてもこの声が聞こえてくる。老人は朗々たる声で、ほーほーほいっ、と拍子を取るようにして歩きまわっていた。子供たちが街中の桜の樹にねらいを定め、辻をまわって行進していると、前からやってくる。

　ほーほーほいっ
　ほーほーほいっ

　紅葉の大木のある家にねらいを定め、捕虫網を振るって小枝を折り、家の人に怒られていると、後ろ手を組んで傍らを過ぎていく。

　ほーほーほいっ
　ほーほーほいっ

　子供たちはその老人の家がどこにあるのか知っていた。
　町でいちばん古く、最も大きな家である。
　老人の脚は少し湾曲していて、腰も少し曲がっている。痩せていて、頭はほとんど禿げていた。
　その風体で、学校のある日の下校時には門の前に打ち水をしていたり、石垣に腰掛けて煙草をくゆらせていたのだ。

　自分たちが夏休みで、普段はいない時間帯に町を歩いている。自分たちが学校に行っているときはこの老人が町中を独りで歩き回っているのだろうか。
　三人はそんな会話をしていた。

　ほーほーほいっ
　ほーほーほいっ

　三人とはまったく関係のないところで空を仰ぎながら歩いているのを見かけることもあった。

　やがて三人は、静かな町で小さな悲鳴を聞くようになった。それはいつでも家の中から、たいてい女性の声で聞こえてきた。
　「きゃあ、だれなのあなたっ」「ひいっ」など。
そしてその悲鳴のする家の玄関をがらがらと開けて、老人がまるで自分の家から出てくるように現れるのである。悲鳴の原因はあきらかに老人にあるように思えた。

　そしてまた、
　ほーほーほいっ
　ほーほーほいっ
　と、声を放ちながら歩いていく。

　やがて、どうもおかしいと、子供たちはおもいはじめた。
　老人が出てくると家の中の声はぴたりと止み、誰も表に出てこないこと。悲鳴をあげるほどなのにパトカーも自転車に乗った巡査もやってこないこと。
　家に帰って親にいっても、親たちは皆笑うばかりで子供たちに何も説明してくれないこと。
　そんなことを話し合っているうちに、子供たちは老人に対して身構えるようになった。　そもそも老人はよその家に入り込んで何をしているのか。
「なんにもせえへんねんて」と一人の少年が親から聞いたことをいった。
「らしいなあ。家の庭をぐるっと回ってでていくんやて」
「そんなんいきなりやったらびっくりするで」
「はいかい、いうんや」
「なんやそれ」
「じいさんみたいな人らのことやろうとおもう」

　夏休みも終わり近く、クマゼミの捕獲はいよいよ困難を極めてきた。道路の上にニイニイゼミやアブラゼミの死骸が転がりはじめている。
　そんなある日、三人組は死骸を横目に、相変わらずクマゼミを追っていた。
　他の蝉を見るたびにクマゼミの透明な翅とか光を浴びると金色にもみえる胴体の美しさがいちばんだと口々にいうのだった。
　ジージージーと蝉の鳴き声をまねたり、生きてんのを捕まえるからおもろいんやんなあ、ともいいあった。

クマゼミの鳴き声がする。三人は音の方向へ駆けた。そこは老人の屋敷前の松の木だった。老人が屋敷の前にいた。真っ黒に日焼けした腕が目立つ。打ち水をしたあと石垣に腰掛けて煙草をくゆらせているようだ。
　子供たちを見るとゆっくりと起ち上がり、近寄ってきた。
　子供たちは警戒した様子を露骨に見せて道の端を通り過ぎようとした。
「貸して」
　そういって老人が一人の少年の捕虫網を、なんのためらいもなく自然にすっと手にとった。子供たちがあっけにとられているまに長い腕が湾曲したかと思うと、すばやく宙をさらった。
「ほれほれほれっ」
　三人の待ち望んだクマゼミをがいとも簡単に網の中にいる。沈黙が少し。

「すげえ」ひとりが唸るように言葉を吐き出すと、すげえ、すげえの連呼になった。

ほーほーほいっ
ほーほーほいっ

　三人の少年は捕虫網を肩に載せた老人のあとを歩いていく。古い寺の墓地の木戸を開けてどんどん歩いていく。少年たちも怖いものなしだ。そして初めて見る栗と栃の大木の下で止まった。
　少年たちはのはるか頭上でクマゼミが鳴いている。よしっ、と老人はいうやいなや木にとりつくとあっというまに数匹をつかまえた。
「おじいさんやるやんか」
「かっこええなあ」
「バツグンやんか」

　クマゼミが三匹。それぞれの手の中で透明な翅を輝かせている。老人の手の中にも一匹。
「おじいさんありがとう」
「すごいやんか」
老人はもごもごと何か言うと、にっこりと笑ってクマゼミを放った。きらきらひかる軌跡が一瞬見えて、すぐに見えなくなった。
「この樹に来年」
　老人ははっきりと言った。そしてじっと少年たちの顔を覗き込む。
三匹のクマゼミが木の翳のなかに光の細い軌跡を描いた。
「うっほっほっーい」
三人は街に向かって駆け出していった。

　ほーほーほいっ
　ほーほーほいっ
　うしろからゆっくりと老人がついていく。
夏がゆっくりと終わろうとしていた。
（了）

さくら、さくら

　花曇りの土曜日、午前１０時過ぎ。
　武市和夫は妻の由子、六歳の一人娘、清花と高野川に沿って散歩をしていた。石垣で固められた堤防の上に細い地道が続いていて、そこからさらに緩い傾斜をのぼったところには川端通りがはしっている。
　和夫たちが見上げる川端通り沿いにはずっと桜並木が続いていた。
　満開である。

「パパ、あのさくらは、かれてしもたん」
　清花が、もみじのような手をあげて言った。
　和夫は頭上に枝を伸ばしている桜並木を見上げた。少し先に、確かに一本だけ花をつけていない木がある。周りが満開なので、余計に目立った。
「なあ、あの木だけ、もうだめなん」
　和夫は、その木をよくよく観察してみた。だいたい、桜は花の美しさに比べて幹はごつごつしている。樹齢を重ねるほどにそれは凄みを増す。その木は相当古いようでもあり、真っ黒な樹皮には、なにやら焼き焦げたような印象すらある。枝先に蕾もない。
「ううん、だいじょぶやで、あの木はみんなより少しだけ遅れてるねん。きっと咲くから」
「ほんまあ。ふーん、がんばってんねんね」
　和夫は自分でも何故そう言ったのか分からなかった。本当は、残念やね、この木はもうお爺さんやから咲かへんの、というつもりだった。

「あなた、ほんとに咲くの」
　案の定、由子が訊いてきた。
　前方に賀茂川と合流する出町の河川敷公園が見えてきた。
「わあーい」
　清花が公園に向かって駆けていく。それを追いながら
「あの子は信じたら、きかないんだから」と由子は眉間に皺を寄せていた。

　和夫が事態の深刻さを知るのは、次の週の水曜日だった。
　夜、清花が寝静まってから由子が話しはじめた。
「あなた、やっぱりあの子、あの桜が咲くって幼稚園で言い張って、みんなから浮いちゃってるみたいよ。保母さんから訊いたんだけど、保母さんが、あの桜はもう年をとってるから花をつける力がないの、といってもきかないんだって。パパが咲くっていったんだもん、って」
「そんな…子供やし、桜が散ったらそんなこと忘れるんとちゃうかな」
「あんた、ひどいこと言うわね。みんなが忘れるとしても、それまであの子はみんなから責められるんだから。しかも嘘つき呼ばわりされて」
「……」
「思いつきで口から出まかせ言って、子供泣かせてどうするの。いじめられるのよ。とにかく、明日の朝、清花に謝って。そしてあの桜が咲かないって説明して」
「わかった」
　そう言いながら和夫は、自分が何故そんなことを言ったのか、その「理由」に思い当たっていた。
思い当たる理由はただひとつ。昔からの癖だ。もうダメだろうといわれることに対して、反射的に、違う、といってし

まうことだった。

　そのためになんども失敗した。
　たしかに、もうあかんやろ、といわれたことに反発して成功したこともある。だけど、それはおそろしく低い確立だった。

　和夫はその原因を知っている。
　六歳の時だった。父の妹が京都へ観光に来ていた。家に寄った叔母と食事をしたときだった。叔母は何年ぶりかにみる和夫の成長ぶりを褒めたものの、和夫の箸の持ち方がおかしい、といいだしたのだ。まあ最近の子は仕方がないわねえ、とその場は収まった。そして確か何かを取って、といったのだ。醤油かソースか…。和夫は今でも覚えている。
…和夫君の右にあるから…という声。
　そして和夫は理解できなかった。「みぎ、ひだり」を知らなかったのだ。

　叔母は目を見張った。和夫はその目を今でも覚えている。これはダメだ、と語る目。
　父が叔母に意見されていた。
　…いくら母親がいないからって、もう六歳よ！最低限のことは親が教えなきゃ…
　父の目が泳いでいた。苦笑いを浮かべている父の顔は赤くなっていた。その顔を見た途端、和夫の心に強烈な負い目と反発が生まれた。
…ダメなことなんかない。ダメなことなんかない。ダメなことなんかない…
　その呪文が、今また心に響きだしてしまったのだ。

　和夫の仕事は「うつわ屋」である。父の店を継いだ。事務や経理は由子が担当している。
若手の作家の新作の梱包をほどきながら、窓の向こうの事務室にいる由子の方をみた。まだ怒っているようだ。今朝、清花に、あの桜は咲かないんだ、と説明したのだが、聞き入れてくれなかった。
…だって咲くっていったんやもん、パパ、咲くっていったんやもん…
　自分の生来の癖で娘を泣かせてしまった。

　木曜日、金曜日、由子がいくら言って聞かせても清花は納得しない。だって咲くんやもん、の一点張りである。満開だった桜はそろそろ散り始めている。
　和夫は考えた。このままでは清花は嘘つきの烙印を押される。自分のために子供に深い傷を残してしまう。

「ちょっと出てくるわ」
　夜七時和夫は家を出た。歩きながら、自分はいったい何をしているんだろうと考えたが、やり始めるとそれも吹っ飛んだ。川沿いの細道から、街灯の間の暗がりに、まだ咲いている桜を探し出すと、下からこっそり近づいて花のついた枝を剪定ばさみで素速く切り取った。そして暗がりを小走りに例の咲いていない桜に近寄る。古い木だから幹が洞になったところがあるはずだ。病気で腐ったところとか…。暗くてよく見えないけれど…
　あった。
　そこに枝をぐりぐりとねじ込む…。
　…俺はいったい何をやってるんだ…
　そう思ったが、思いを振り切って細道を戻ろうとした。
　目の前に由子が立っていた。

　由子の説諭は深夜に及んだ。テーブルには和夫が切り取った枝が置かれている。

何とかしたいと思うのはいい、努力するのもいい。そういうところがあるから私はあなたと結婚したのに、と由子は泣いた。
なんて姑息なの。なんて卑怯なの。なんて馬鹿なの。子供だましにもならない。あきれ果てた。見損なった。恥ずかしくて顔から火が出そうだ、と。

土曜日の朝。
由子の顔は青白く、目は赤かった。清花は元気いっぱい、和夫に桜を見にいこうとせがむ。
「じゃあ桜をみたら、朝はみんなでマクドナルドに行こう」と和夫がいうと
「いやっほお」と清花はジャンプした。

清花が先に立ってスキップしながら川沿いにすすんでいく。
「昨日はごめん。どうかしてた。もうあんなことは二度としない。きょう桜の木の下で、はっきり言う。清花に、パパ嘘ついてたって謝るから。そのあと清花のこと頼む」
「ふうーっ…もうあんなこと二度としないでね…わかった、清花は私がなんとかします」
斜め前方に黒々とうずくまる老桜が見えてきた。周りの桜も散りだしているから、満開の時ほど目立たないけれど、ほとんど枯れているように見える。前に進んだ清花が 斜面を駆け上がっていく。蕾のない木。花など咲くはずもない。清花が首を傾げている。
和夫はその小さい姿がたまらなく愛おしくなった。
…どんなことがあってもあの子を傷つけたらあかん。まして親がそんなことしたら…。
「さあいきましょ」由子が背中を押した。
清花は木の真下まで駆け上がると、そのままためらうことなく川端通りの側へ回り込む。
交通量の多さに和夫が
「清花、あぶないよ」と大声をだした。
清花が顔をこちらに向けた。
「パパあ、ママあ、はやくはやく」
和夫と由子は顔を見合わせると、老桜のもとへ急いだ。

高野川からみると、まだまともな幹が、川端通りの側は酷いことになっていた。幹に腐りが入り、真ん中がすっぽりと洞になっている。もう倒れる寸前の桜のようにみえた。その空洞の脇から中に向かって短い枝が数本上に伸び、そこに花が三輪だけ咲いていた。
「あ」
和夫と由子は息をのんだ。
「ねえ清花、あんた知ってたの」
清花が肯く。
「昨日の夕方、みんなと遊んでいたら、桜の話になって、しょーめーしろよとか言われたからここにきたの」
「みんなどういってた」
「すっげえーって！！そんときは開きかかってたんやけど。ほら咲いてるんだもん。パパのいったこと間違ってへんもん」
「あらあ」
「あ、ああ」
まるで洞に守られるように淡い色の花が咲いている。
清花はきゃあきやあ言いながら河原に降りていった。
「和夫さん、桜に助けられたね」
「まったく」
清花が駆けてきた。

「もう桜なんて、桜なんてもういいやんか、お腹すいたよお」
三人は手をつないで歩き始めた。

（了）

ディーゼル

　モーニングサービスの忙しさも一服し、手の空いた私は窓の外をみた。朝からの細い雨はまだ降り続いている。外は一面、濡れて淡く光っていた。
　カウンター端のスツールの下を覗き込んでみる。犬は眠っていた。
　今から三時間前の午前六時、店の玄関前にずぶぬれの犬が立ちすくみ、震えていた。いつ頃からそこにいたのかは分からない。
「どうした」
　声を掛けると、くぅんとなく。茶色の雑種、柴系の中型犬である。黒い首輪をしていた。脱走したものの帰れなくなったのか、捨てられたのかのどちらかだろう。
　とにかくこのままにはしておけないので、首輪を掴み店の中にいれた。犬は素直だった。
　店で使うタオルを何枚か引っ張り出してきて、犬の身体と脚を拭いた。大きな怪我はしていない。からだもそれほど汚れていない。皿に水をやると、ぺたんとその前に坐った。

　私の店はカウンター席に五人とテーブル席が三つの喫茶店である。売り物はサンドウィッチとコーヒー。私一人でやっている。
　モーニングサービスの用意をしなければならないので、首輪にタオルを四本結んでリード代わりにし、カウンター一番奥のスツール脚に結びつけた。スツールの上には「予約席」の札を置いた。それから、その日の新聞広告の裏に「犬、預かってます」と書いて外の看板に貼り付けた。

　早朝やってくる客は毎日決まっている。サンドウィッチ用の白い皿とコーヒーのためのソーサーを６つずつ並べて、用意を始めた。常連が次々とやってくる。そして誰もが、犬がいるの？と声を掛けてくる。幸い、犬が駄目な人はいなかった。

「マスター。犬、久しぶりじゃない」
　近くに住んでいる六〇歳の一人住まいの女性、藤本さんがいう。毎朝、店にきてくれる。
　藤本さんはフレンチブルドッグを飼っている。名前はヒデキ。冬場はヤンキースのロゴの入った犬用ベストを着せて一緒に店にやって来る。
「そうですね、五年ぶりかな」
　かつてゴールデンレトリーバーの「ジュピター」と私は一緒に暮らしていた。ジュピターはいつも店の奥で横になっていて、お客さんに可愛がられていた。もちろん「ヒデキ」とも仲良しだった。
　五年前に亡くなった。
　店の名前も「ジュピター」。看板には笑っている犬の顔写真をつかっていたので、犬の嫌いな人には敬遠された。ペットショップと間違えられたこともある。看板も店の名前もそのままである。
「でもさ、急だったんだろうけれど、タオルのリードはないでしょう。ジュピターのは残ってないの」
　なかった。いつまでも思い出が残るので全部捨てていた。

　一人で店をやっているので、途中で出かけることができない。
　藤本さんが、わたし、暇だから買ってきてあげるといって新しいリードとフードを持ってきてくれたのが、午前十一時。それからランチの忙しい時間帯である。

　すぐにでも警察と保健所に連絡しなければならない。飼い主が探しているとしたら急がねば。
　藤本さんとヒデキがずっと横にいてくれて、犬の相手をしてくれている。
「だけどさ、この子、人の出入りが平気だよ。ずいぶん人になれてる」
　ほんとうにそうだ。疲れもあるのだろうけれど、おとなしく横になっている。

　警察に連絡したところ、今のところ届けはないという。何かあったら連絡をもらうことにして、こちらで面倒を見ることにした。藤本さんの提案である。警察のケージの中より、人のそばの方がいいよ、と。
　「ジュピター」がいた頃からのお客さんは、皆、犬が好きでわいわいと盛り上がった。脱走だろうか、捨てられたのだろうか。話はそこに集中した。
　もし捨てられたんだとしたらひどい、と皆同じことを言う。
　あとは「脱走自慢」である。
　　本木さんとこのシェパードは鳴滝の家から逃げて、見つかったのは鞍馬だったとか、清水さんのところの黒ラヴは花園から逃げて、仁和寺の八十八ヵ所巡りのところでみつかった、とか。
草野さんのところのグレートピレニーズは２００メートル逃げたあと、道の真ん中で寝てしまい周辺を大混乱に陥れたとか…。どれもこれも大型犬である。夜道で出会ったりしたらさぞ怖かっただろうな、とおもう。もちろん怖がるのは人間だ。
　ひとしきり自慢した後、さて、こいつはどこから逃げてきたんやろ、だ。
　知るかい、そんなこと。

「『しつけ』はきちんとできてるよ」
　犬がもぞもぞしたとき、それを排泄欲求と見抜いて散歩に連れて行ってくれた山本さんが教えてくれた。山本さんは７２歳の独り暮らしの男性。ずっと柴犬を飼っていたけれど、二年前に犬が亡くなった。人が犬より先に死んだら犬が可哀想だからと、その後犬を飼うのは諦めている。
　時間はどんどん過ぎていった。
　警察からはなんの連絡もない。犬は私のベッドサイドで眠り、朝は開店前に散歩し、店で藤本さんや山本さんに可愛がられ、散歩にも連れていってもらった。不思議な癖もわかった。
　突然立ち上がり、しっぽを振り、リードが結わえ付けられたスツールごと玄関の方へ出て行こうとするのだ。
一度、藤本さんが席から落とされそうになったこともある。或いは山本さんと散歩をしていて、特定の車が横を通ると、異常に興奮するのだという。
　ある日のランチタイム。おとなしくしていた犬が突然立ち上がって、しっぽを振り出した。
外へ出ようとする。それが二回続いた。そのときは私が押しとどめたけれど、しばらく興奮が冷めなかった。
「わかったよ」
　と、いったのはタクシードライバーの渡瀬さんだ。
「こいつは、ディーゼルエンジンの音に反応してんだよ。さっきからそうだもの。ドゥルルルってあの独特の音が聞こえると反応してる」
　山本さんがいうには、道で反応するのはワンボックスだという。
「ありゃあ全部ハイエースだよ」
「トヨタ・ハイエースのディーゼル車」
　これがこの犬の来歴の鍵を握っているらしいということはわかった。だからといって、どうすることもできない。
やがて犬の名前は自然と「ディーゼル」になった。
　藤本さんは「ディー君」とよび、「ディーゼル」を「ヂーゼル」と発音する山本さんは「ヂーヂー」と呼んでいる。
最近、そう呼ばれて反応するようになった。
　相変わらず警察からはなんの連絡もないままだった。
　それから時間はまた少したった。

店を閉めてから夜の散歩に出て、私も時々トヨタのハイエースに出くわした。ひょっしたら自分を置き去りにした車に尻尾を降り続ける「ディーゼル」を見ていると哀しくなったものだった。

最近、それが少し変わった。

立ち止まり、頭を上げて、じっと見据えているのだ。テールランプの去っていく先を。

さあ、ディーゼル帰ろ！

（了）

脱走

　　春に、一人暮らしの医師が亡くなった。
医師は庭で柚子と蝋梅と草花を育てていたのだが
庭も診療所ごと壊された

焦げ茶の土が風に曝されてしばらく、夏には
前面にコンクリートが打たれ。みるまに
アパートが建った。

秋になるとアパートと駐車場の境界の金網の下から
黄緑の茎が何本も地面を突き破った
医師が植えていた彼岸花が金網に沿って一列に咲いた
斜めに逃げる角度で

冬になると彼岸花は枯れ、地下茎だけで生きていく
駐車場の土は白く荒れたままだった。

やがてまた春が来て、駐車場は取り壊された。
土が深く掘られ、基礎のコンクリートが打たれ、マンションが建った。
夏には新しい人たちが住み始め、あたりは賑やかになった。

秋のある日、子供たちが彼岸花を手に持って学校から帰ってきた。
親たちが毒だから、と叱ったものだから
子供たちはドブに花を捨てた。

学校に行ってみると校庭の縁に彼岸花がまっすぐに並んで咲いていた。
去年見たのと同じ彼岸花である。
今年初めて咲いたのと女の子がいう。

秋深く、校庭に桜の落ち葉が積もった。
小学校が廃校になると回覧板で知った。
やがて冬が来る

ラジオ

ラジオが聞こえた。ここは新幹線の車内。京都の実家へ帰る途中である。
　私はいつも新幹線に乗ると、窓の外に「浮かびながら」遠ざかる富士山を見るのが好きだった。だけど今日は富士山よりもラジオの音が気になった。誰かのラジオの音が低く聞こえる。音源がわからないまま私はそのラジオを聞いていた。

　甥の結婚式に出席するために帰るのだ。スーツケースを宅急便で送ってあるからバッグ一つ。最初は日帰りを考えたのだが、夕方の式なのでどうしても泊まることになった。
　小さい声で、猫がいるから日帰りしたい、と父に言ったら叱られた。父も何故か小さい声だった。

　名古屋駅でホームからラジオの音が聞こえた。ホームにラジオなんか流さないはず。下車する中年の男性のブレザーの胸ポケットからイヤホンが見えた。聞こえないはず。だけどラジオの音が聞こえた。

　京都駅から家に向かうタクシーでラジオの音が流れていた。久しぶりの関西弁のＤＪが懐かしい。
　家に着く。父も母も元気だ。嬉しい。母から甥の結婚までの馴れ初めを聞き、親族の消息を聞く。お昼に久しぶりに一家そろってお寿司を食べた。もう両親も結婚の話は一切しない。経済的な自立云々ももう言われない。身体のこと、家の植栽の様子、ご近所の話、「ああ、そういえばあなたと同級生の」…そんな話。

　それから三人で式にいく。カソリックの教会である。甥はいつのまにカソリックの信者になったんだろう。あまり深く考えなかった。新郎新婦の緊張と喜びの混じった晴れやかな顔がよかった。一時間ほどおいて近くのホテルで披露宴。教会の外に出ると街の果物屋からラジオが聞こえた。
　披露宴では詩吟と歌と酔っぱらいが目立っていた。私たち三人は全員、下戸なので、しらふ。叔父があきらかに…つまんねえ…という顔をして、私たちのテーブルを素通りしていく。結婚する若い二人は輝いていて、それがとても嬉しかった。もっともっと幸せになって欲しい。

「幸せになってね」と声をかけて、披露宴会場をあとにする。まっすぐ家に帰ると、母が伊賀上野の新茶をもらったから、とお茶を入れてくれる。私たち親子はお茶が大好きだ。
父も母もとても静かな人で、わたしたちは静かに話をする。
「お嫁さんきれいだったね」「そう」「うん」
　静かに笑ったりして。

　部屋に戻る。私の部屋は昔のままにしていてくれていて、そこに布団をしく。
昔、使っていたラジカセを押し入れから引っ張り出して聞く。ラジオ。ＡＭ。千葉の私の家でもタエちゃんがラジオを聞いているはずだ。

　私は猫を飼っている。今晩初めて、猫に一晩の留守番をさせている。猫好きの友達や飼っている人たちはみんな大丈夫というし、いつも仕事の間、「独り」だからその延長線上だと思えばどうという事はない。ましてや会社の残業で遅くなった日もあるのだし。

だけどいざその日になると不安が頭をもたげてきたのだった。

私は四十二歳独身。東京の大手家電メーカー本社の総務部で働いている。小さい頃から猫が大好きだった。好きだから見つける、というわけでもないのだろうけれど、空き地やお寺の境内や校庭の欅の下などでなんども捨てられた子猫を見つけた。だけど親が許してくれず家では飼うことが出来なかった。外で世話をするのがせいいっぱいだった。
去年の冬、空き地に捨てられた子猫を見つけた。それがタエちゃんである。アパートでこっそり飼っていたのだけれど、大家に発覚。猫と暮らしたいがために貯金をはたき、それを頭金に格安の小さな中古の家をローンで買った。まるでそうするために貯金してきたかのように。

私はぺたんとしゃがみ込んでタエちゃんを抱きしめた。
白黒の、子猫の割には大きな雄猫で、友達は「カリアゲ君」という。黒と白がうなじのところでまっすぐに分かれていて、子供の刈り上げた頭のようなのだ。
「お前、『独り』でいられる？ね、一晩だけだから、ね」

最初はペットホテルに頼もうと思った。だけど猫を飼っている同僚は、一泊ぐらいは平気だという。猫を家に置いて温泉に行った事もあるというのだ。ペットホテルは環境が変わるからかわいそうだよ、と脅されもした。
私は決めた。キャットフードをボールに４つに分けて入れ、水もボールにたっぷりと分けて入れた。トイレも念入りに掃除した。なんのことはない、いつも出勤前にやることを二日分しただけだけなのだけれど。
タエちゃんを見た。
「うにゃ」
「大丈夫だよね、タエちゃん。ね。タエちゃんは強いもんね」
「にゃ」

出かけようとして振り返ると、いつも出勤前にはベッドに潜り込んでいるタエちゃんが胸をはって私を見ている。猫も何か様子がおかしいことに気がついているのだろうか。私の前にしんと静まりかえった部屋をがある。いつになくそれが気になった。私は家の中へ戻るとラジオをつけた。賑やかな漫才師の声が部屋に流れ出した。私の気休めなのは承知の上だけれど、タエちゃんが人間の声や音楽で気を紛らわせてくれれば、と思った。毎朝、起きたときに聞くＡＭ局にセットした。朝になればタエちゃんにもお馴染みのテーマソングが流れる。だから？それも人間の勝手な思いこみではあるのだけれど。

日曜日、私は始発で東京に帰った。家を出る時、母が、お正月にタエちゃんを連れてきなさい、という。一人だけの留守番なんて可哀想だからという。お父さんもいいっていってるから、もし無理なら私たちが千葉に行ってもいいからね、と。
お正月の帰省のことは完全に頭から抜けていた。それに、両親はずっと猫が嫌いなのだと思っていた。
なんだかうれしいはずなのだろうけれど、あれれ、という気持の方が強かった。
帰りの新幹線でもラジオがどこかで鳴っていた。そのうちにタエちゃんのことを思うでもなく、ぼんやり窓の外を眺めていると、空に忽然と富士山が浮かび上がった。はっと目が覚めて関東へ戻ってきたと実感する。それから、あっという間に東京着。新幹線から乗り換えて、一目散に家をめざした。

玄関の鍵を開けようとすると中からみゃっ、と声が聞こえる。ラジオもずっとなっている。玄関から居間の戸を開くとそこにタエちゃんがいた。
みゃあみゃあとうるさいぐらいなく。あー、いい子だったねえ。ただいまあ、といいながら抱き上げてそのまま部屋をぐるっと見回した。トイレの砂が部屋に散らかり、文庫本のしおりと耳かきがくちゃくちゃに噛まれていた。足許にじゃれつくタエちゃんをそのままにざっと掃除をする。
ラジオの前には座布団が一つ置いてある。真ん中が丸く沈んで、白と黒の細い毛がいつもよりたくさんついていた。

（了）

猫の手

二週間ぶりの部屋に見慣れた顔が集まった。
　全員ベッドに横になり、点滴を受けている。
私のベッドは窓から遠く、首を廻すとずらりと並んだ四人と、隣の病棟の硝子窓が見える。
「点滴部屋」と横たわった私たちはいう。しかし点滴の間隔もばらばらだし、種類も違う。注射針の刺さっている部位も、手、腕、足などそれぞれ違う。
　ただ、全員、癌に冒された身体を持っている。点滴されているのは抗癌剤だ。

　私は４８歳。乳癌である。比較的早く見つかったので、抗ガン剤で叩き、小さくしてから除去するという方針だ。それは私の希望でもあった。
　なかなか良くはならない。悪くなるスピードが落ちてはいるのが幸いだが。

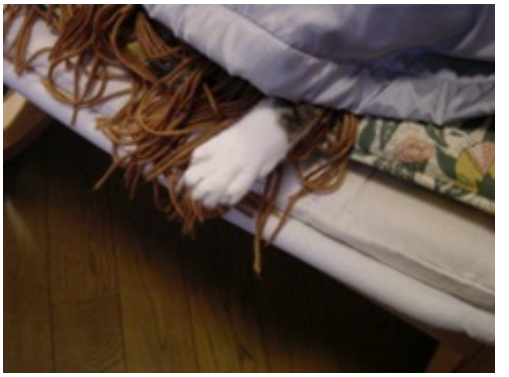
　隣の６０歳の男性とはよく一緒になる。同じ薬剤をつかっているからだろうか。二週間おきという間隔や経口の薬との併用もよく似ている。自然とよくしゃべるようになった。なにせ三時間から四時間ベッドに縛りつけられているのだから、お互い気の紛らわしようがないのだ。

　今日の彼の話。
　彼は家で犬を飼っている。彼が抗癌剤の点滴を受けて帰宅したとたん彼が嘔吐を繰り返すのにあわせたように、その犬は嘔吐を繰り返すのだという。
「妻が獣医さんに連れて行っても異常は見つからへんのです。ストレスに間違いないて。それがね、まるで自分も一緒に苦しまなあかん、というように吐くんです」
「日にちがたてば人は回復していきますよね」
「そう、それにあわせて犬も元気になっていくんです」
「はあ、なんだか…」
「なんかいじらしくてねえ。ほんまに涙でそうになりますねん。お宅はペットはいはりませんの」

　今日の私の話。
　私の家では猫を飼っている。夫が猫好きなのである。わたしの癌が見つかったのが五年前。猫が我が家に来たのが四年前だ。
「私の病気もあるし、私は反対したんですけど、夫がどうしても言うんでこうたんです。そやけど案の定、世話はわたしがせなあかんようになってしまいましてん」
「ほお、そりゃ大変や」
「体がしんどくても、ほっとくわけにもいけへんでしょお。せっせと育てました」
「かわいいでしょ」
「ええ、もちろん。いちど、今のと違う抗癌剤を使ったとき、あんまりきつかったんか、帰って横になってたら心臓のあたりが苦しくなってきたんです。あんまり酷なったら病院いかなあかんな、と思てたら、なんと猫が胸に飛び乗って来たんです」

「それ、余計しんどいですやん」
「そしたらね。猫が胸を揉み出したんです。ちょうど真ん中のあたり」
「は」

「犬、飼うてはるだけやったらわからしませんか…。あの、猫てね、前足だけで、肉球で床を揉み出すように、きゅっきゅっとやる癖があるんです。よう絨毯とか毛布の上でやるんですよ。それを私の胸の上でやったんです。二時間も」
「えええっ、二時間んん。それは凄い」
「そしたらだんだん落ち着いてきて、事なきを得てねえ」
「ははあそれはよろしかったですなあ」
「主人は、それみてみ、猫飼って大正解やいうんです」
「いやほんまにそうですよ。助かりましたなあ」
「そやけどね」
「どないしました」
「主人、それやったらもう一匹飼おう、いいますねん」
（了）



花冠

　私の家のある町内のほとんどは、古いお寺の地所である。東西南北の隣町も同じくそうである。
もちろん寺から土地を買い取っている人もいるから、すべてがそう、とはいえないけれど、それでも寺の土地が圧倒的である。

　元々は広い境内だったのである。その名残で取り残された松の木があった。それはちょうど山門を出たところで、昔そこには池があったという。
池は埋め立てられ交差点となり、小さな石橋の欄干だけが道路の上に残っている。

　そのロータリーのまん中に黒松の木が一本残っていた。かつては池の畔の松だったのであろう。黒松は相当な樹齢で、どんな年寄りに聞いても、ちいさい頃からずっとあったという。
松の木の周り、直径２メートルばかりだけ地面が露わになっていて、他はすべてアスファルトに覆われていた。

　二年前のこと、ここからそう遠くないお寺の有名な黒松が松食い虫にやられて枯れた年に、この黒松も枯れてしまったのだ。

　私は今でも覚えているけれど、木の解体にきた造園業者が、木の根を掘り起こすのに、舗装された部分をさらに一回り大きく崩したのだった。そして次の日、同じ業者の手で黒松のある程度大きな若木が植えられたのだけれど、かつて地面を占有していた瘤だらけで盛り上がった根もなくなり、崩されたアスファルトのかけらもきれいに掃除されたので、新たに入れられた土がみずみずしいままに、まるで植栽好きな人を誘うようにあったのだった。

　黒松は順調に生長し、高さはあっという間に５メートルを超えた。
　そしてそれを待っていたかのように、路地の植栽好きのお婆さんが、ひとつ、またひとつと根元に草花を植え始めたのだった。種類は和洋混合。色も雑多である。誰からも文句は出ず、どこからも咎めはなかった。お婆さんは朝夕欠かさずに水遣りをし、時に肥料を与え、何かが枯れると新しい何かを植えた。
　そうしているうちに黒松の根元に、こんもりとした草むらができあがったのだ。
　「なんやもったいない気がしてね。わたし、『地』で植えたことがないねん」
　植え始めた頃、お婆さんは照れくさそうにそう言っていた。
　そういえば町内はすべてアスファルトで覆われ、路地の長屋などは、地面が露わになったところはひとつもなかった。みな鉢植えを玄関先や窓の下に置いて育てていたのだ。

　そして、今年の夏。
　黒松の根元の「草むら」に異変を感じたのは私だけではなかった。角の八百屋、北側の主婦、東側の主婦、それに私がお盆の夕暮れに黒松の根元に集まっていた。

　萎れた草花の前に、それぞれが示し合わせたわけでもないのに、如雨露を水でいっぱいにして集まっていた。
　猛暑の昼からゆっくりと萎れていった草花の異変に、気づいた順にあつまったようだ。

「このままではあかんね」
「あかん」
「おばあちゃんは？」
「体調崩して寝込んだはるて」
　八百屋が路地の奥のお婆さんの家を訪ねてきたという。
「ばあさんの面倒は、ご近所がみてくれはる」
　みな、うんうんうんと頷く。
「夏ばてかな」
「もうお年やからね」
　皆が手にしている如雨露は緑のプラスチック製、ブリキの大きいやつ、ポリでできたイギリスのブランドもの、赤いプラスチック製と色も形もバラバラである。そこから一斉に地面に水が注がれた。

　植栽を趣味としている人は、他の人の育てているものに手を出さない。
　そこにはその人だけの「手のあと」が着いているし、思いも込められている。いわば聖域のようなものなのだ。自分がそうであるから相手のことも想像がつく。
　しかし、手助けとなったら話は別である。私たちが「いじる」ことの承諾を八百屋が取り付けてきていた。
　早速、草むらの前に集まった我々は、植物の状態をチェツクした。
　枯れ枝を取り除き、雑草を抜き、花柄を摘む。
　　さらに調べていくと、そこは様々な工夫を凝らした花壇になっていた。
地面にさらに盛り土をし、色もサイズもバラバラの煉瓦でぐるりをから土が流れ出るのを止め、白やら緑やらの使い古したワイヤーで、外に倒れていく植物を支えていた。
　お婆さんがこつこつと、ひとつひとつ丁寧につくりあげていったのだ。
　水の追加は、いちばん近くの八百屋が、溜めた雨水があるからと巨大なポリタンクから提供してくれた。全員が何度も八百屋と草むらをいったりきたりした。

「そやけどまあいろいろやね」
　と、北側にすんでいる主婦が言う。
　白と黄色のオシロイバナ、真っ赤なベゴニア、何色の花が咲くのか菊の苗がある。名前の分からない赤い花と青い花。ともに背が高い。ペチュニアもある。
「これは折られてるし、こっちは踏みつけられてるやんか」　と八百屋。
　　あきらかに捻り切られた跡が所々にあり、ベゴニアの一株は踏みつけられて折れていた。くっきりと足跡が残っている。
　みんなが黙って手入れを続けた。

　狭い場所なので、あっという間に手入れは終了。めいめいが如雨露と剪定ばさみとゴミを入れた袋を手にして帰って行く。　西側に住む私は、そのまま自分の家の前の鉢に水遣りに戻った。すっかり影の中に入った我が家から、まだ西日の残照を浴びている草むらがみえる。ゆっくりと萎れていた草花たちが起きあがり出していた。
　夜、花火に興ずる子供たちの声に何気なく外を見ると、草花たちはすっかり回復していた。遠い街灯に照らされて、まるで花の冠のようである。

（了）

朝の手

朽ちた家の前庭から紫陽花があふれだし
つとめにいく人の裾を朝露が濡らしていた
通りにせり出した植栽に
手の幻が透けてみえる
黒松の枝を切り　つつじの花がらを掃き
アマリリスを見張り番のように玄関脇へ置いた
かつての手
もうすぐ弾けるように百合が咲く
その手をいつまでも呼び続けるように咲く
すぐに手は空中に浮かんでくるのだ

鬼灯(ほおずき)

　夏の朝の出会いだった。
　私の前を、真っ白な脛に陽光を反射させながら少年は歩いていた。
紺色のキャップを被り、その下で黒髪が光っていた。真っ白な半袖のシャツ、紺色の半ズボン、そして輝く脚の下は革のサンダルを履いていた。
　腕に画用紙を挟んだ画板を抱え、右肩から黒い布の鞄をたすき掛けにしていた。なかには絵の具がはいっているのに違いなかった。
　子供。そう小学校の高学年だろう。

　私はぼんやりと歩いていた。
　遠方の若い友人が今朝亡くなったという知らせを聞いたばかりだった。
　友人は三十三歳。私より一回り年下である。進行性の癌が全身に転移し、もはや手の施しようがない、と医師から宣告されながら、驚異的な粘りを発揮して闘っていることをご両親から聞いていた。

　親戚一同を集めるほど危険な状態になること、数度。それをことごとくくぐり抜けてきたのに、比較的安定したと思われたときに、ふっと灯りが消えるように逝きました。苦しまなかったのがせめてもの…
といったあと、友人のお母さんの嗚咽が電話の向こうから響いてきた。

　私にとってもこの知らせは不意打ちだった。容態の安定したつい二週間前に病院近くの喫茶店で話をしたところなのである。日進月歩の抗癌剤の話、死の恐怖から癌との共生まで彼は語っていたのだ。

　彼は取引先の社員である。商談を何度か重ねるうちに、大学は違うけれども同じ高校の出身であることがわかり、気安く仕事以外のことでも話すようになった。そして、その頃から私を「先輩」と呼ぶようになった。
　よく気のつく男だった。神経が細やかで相手がやろうとすることがすぐに分かる男だった。
その場に何が欠けているのか、何がもとめられているのかをたちどころに把握し、判断できる男だった。
　大学ではサッカー部に在籍し活躍したという。美しい首をしていた。

　私はそのまま何も考えずに、少年の後ろを歩いていた。細い路地を東へ向かっていた。

　私と彼がより親しくなったのは、私が癌を発症してからだ。
　大腸癌であった。かなり大きかった。その術後、度々病室に見舞いに来てくれた彼にも二年後に癌が見つかった。
　私はまだ点滴による抗癌剤を二週間に一度のペースで続けている。私の今後も予断は許されないけれど、その間に、彼のより悪性な癌は、一気に私のレベルを追い抜いていったのだった。

　死のことを考えると怖い。何故自分だけがこんなことに。そんなことは発症してすぐに語り合った。専門書を交換し、様々な療法も語りあった。
　抗癌剤の苦しみが分かるのはお互いだけだったし。いつか彼の髪の毛はすべてなくなった。わたしももうすぐなくなる。
　いろんなことを話して…。

少年は長方形の公園に入っていった。四本の大きな欅の枝が天蓋のように公園の上を覆っていて、空気が一度に柔らかになった。
ぐるりを腰ぐらいの高さのコンクリートの塀で囲まれ、塀のすぐ横に民家があった。
狭い長方形の中は鉄棒、滑り台、シーソー、ベンチ、そして砂場。
砂場の淵に少年は腰をおろすと塀の上の鉢を見上げた。

公園の塀の上には各家の鉢植えの植栽がずらりと並んでいる。少年が画板を開き、紙を留めた。画材の用意を始めたとき、私はお構いなしに近づき声をかけた。
「画、みせてくれる」
少年は少しはにかんで、画板をこちらに向けてくれた。鬼灯(ほおずき)が描かれていた。橙の袋がいくつも画面に浮かんでいる。
「ありがとう」
少年は塀の上に視線を向け、写生を始めた。
ベンチに腰を下ろした。
途端に涙が流れ出した。
声が出そうになると口を手で押さえた。
ただ悲しかった。

顔を上げると、少年の背中が見えた。描いている姿がまるで祈るようだ。
歩み寄って、背中から画を覗き込んだ。少年は袋の皺の一つ一つまで丁寧に写し取ろうとしていた。画面に浮かぶたくさんの紡錘形の鬼灯がすべて人の顔に見える。
ああ、と口に出したのだろうか。先輩、と空耳がしたのだろうか。
私は立ち上がり、歩き出した。彼のところへ行かねばならない。
私の背中をそっと押す、彼の気配だけがしていた。

（了）

石に融ける

　五月に入って突然真夏日になった。気温は午後四時を過ぎても３０℃近くあるように思えた。
　私はサンダル履きで自転車に乗り、妻に頼まれたプレーンヨーグルを買って帰る途中であった。

　東西にのびる道にさしかかり、誰かが前方で座り込んでいるのがみえた。近づいてみると小学生とおぼしき少年だった。
　少年は黒いランドセルを背負ったまま、鋪道に両脚を投げ出すようにして腰を下ろしていた。
　西に傾きだした陽の光をアスファルトは強く照り返している。カーキ色の半ズボンから伸びた両脚が熱くなったアスファルトにじかに触れている。
　どうしたことだろう、と自転車を止め、少年を覗き込んだ。

　少年が坐り込んでいる側は、古い家の、聚楽色の土塀が続いていて、壁と道路との間には、一抱えもありそうな大きな石が等間隔で並べられていた。
　駐車をさせないためであり、たぶん犬矢来の代用でもあるのだろう。黒い立派な石であある。
　少年はその中の一つの石に頬をつけて目を瞑っていた。

　なんと幸せそうな顔だろう、と思った。まるで邪気がない、が、まったく無防備でもあり、つまり惚けてしまっているようにもみえた。
　何故か声をかけるのがためらわれる。じっと顔をみつめていたのだけれど、もう夕暮れが近い。それほど広くない道路を先程から車が何台も行き交っている。
「おいどうした。しんどいのんか」
　肩を掴み、声をかけてみた。なんの応えもない。これは警察に電話したものか、いや救急車を呼ぶべきだろう。熱中症かもしれない。掌に肩の温もりが残った。陽光の温度がシャツに潜り込んでいるかのようである。

　すると土塀の切れた角から老人が出てきた。こちらを認めると、どうした、といいながら近づいてくる。
「ああ、これは」
　といって跪く老人は銀色の短い髪で、黒ぶち物の丸い眼鏡をかけていた。素足である。
「救急車を呼びました」というと
「それにはおよばなかったな」という。

「これは石に酔うておるのですよ」
「酔う、ですか」
「そう、午の間中この石にこもった熱にさわると、気持ちがよすぎて酔うてしまうのです」
　さわってご覧なさい、というので、１メートルほど離れたもう一つの大きな三角錐の石に触れてみた。いいようのない温もりが掌につたわってきた。
「ほれ、感じるだろ」
「ええ」

体の芯まで届いて、ほぐしてくれるような感覚がある。
「しかし車が危ないのでは」といいながらも、わたしは包み込まれるような感覚になっていく。
「どれ」
といいながら、老人はもう一つの石にからだを寄せて目を瞑っている。

「大丈夫ですか」
「ああ大丈夫」
「そもそもこの石は路上駐車を禁ずるものでしょう」
「え」
老人が目を開いて意外という顔をした。
「知らないのか。この石はこうするためにあるのだよ」
「からだを寄せるために?」
返事はなく、老人は石に顔を寄せて恍惚とした表情を浮かべていた。

（了）

菫

　　鋭い歯の緑が重なり
あいまから鋼色の茎が直立する
枯れた井戸の底
光を浴びるまで花は繰り返され
光の中で水になる
そのままで　菫

冬の陽

　天気予報では高気圧が紀伊半島の南をゆっくりと移動していく、といっていた。節分の前といえば一年で一番寒い頃なのに、春の気圧配置である。おかしな日ではあったのだ。

　北向きの、二階の硝子窓に光が注ぎ込むようにと、北の庭に楠を植えて１０年が過ぎた。ある程度成長した大きな苗を植えたので、高さが二階を超えていくのは早かった。
　思い描いていたとおり、楠の常緑の葉は「鏡」の役割を果たし、冬は南側の軌道をゆく太陽からの光線を反射して室内をほんのりと明るくしていた。

　東向きの、一階の硝子窓には昼まで光が注ぎ込む。冬の光をたくさん取り入れようと、秋には枇杷の木を深く剪定した。高さは二階の窓の下くらい。
　少し残した枝の花には鳥が蜜を吸いにやってくる。

　二階の北の部屋には、たたんだ蒲団をインド綿の麻の布でくるんだ 犬のためのベッドがある。鏡からの　高気圧が紀伊半島の南を通過していく。節分前といえば一年で一番寒い頃なのに、春たけなわの気圧光を吸って、いつも微かにぬくもっている。けれどもこのベッドに犬はもう上がらない。老いた犬はこの高さを自分で飛び乗れなくなったのだ。
　一階、居間の東側窓の下には新たな購入した犬のベッドがある。ふかふかした布地のボックス型で、一部出入りを容易にするための凹みがあり、犬はいつもここにいる。

　光を浴びる犬には影がみえない。光のプールに寝ているようだ。時折脚がひくっ、と動き、なにやら寝言のような呟きをらすのだけれども、微かな「うぐぐ」がなにを意味するのか、こちらがわかるはずもない。
　夢を見ている。家族はみな、そういう。

　他の季節とは別の、光の恩寵である。少しでもあるだけでありがたい。

　太陽が東の窓から離れたので犬と散歩に出かけた。
　公園に行くと、砂の広場が白く発光していて目が痛いほどだった。四角い広場のそれぞれの辺にベンチがあって、それぞれに一人ずつ坐っていた。
　一人のおばさんは豆本のような小さな本を読んでいる。一人の会社員はお茶のボトルをじっと眺めている。一人のガードマンはお弁当のおかずを見つめている。一人の女子学生はケータイをのぞき込んでいる。
　私と犬はゆっくりと彼らの後ろをまわりながら、白砂がますます発光していくのを感じていた。四人のうなじも輝き始め、反射光が広場外のヒマラヤスギの巨木にあたって揺れていた。たぶん私と犬も光を蓄えていたのだろうとおもう。

　午後一時近くになり、会社員とガードマンが立ち上がった。おばさんと女子学生が顔を上げ、私と犬が左回りの半分が過ぎた時、何か光の塊がふわりと動いた気がして、目をつむった。
　次の瞬間、ヒマラヤスギの太い枝が折れて落ちた。折れる音はなく、枝が地面に落ちる轟音だけが響いた。

枝の向こうで、冬の影が蒸発していくのがみえた。その先の塀の横に車を止めて昼寝をしていた営業マンの顔に白い光が集まりだした。さらにその向こう、黒い板塀のある家の北側の窓に光が流れ込んでいくのがみえた。

窓の中が一瞬で見えなくなった。

窓の下の寒さに縮れたゼラニウムの葉にも光がいっぱいに注ぎ込んでいくのだった。

おばさんは豆本を読み続け、女子学生はケータイに親指を這わせ始めた。ガードマンは東階段、会社員は北階段から退出する。

私と犬はもうすぐ砂の広場を一周する。

冬の陽が、再びゆっくりと積もり始めた。砂に、肩に、うなじに、顔に、樹に。

（了）

南天

　ちょっと実家へいってきて、と妻から頼まれて、上京区の古い家を久しぶりに訪れた。　一人住まいの義母は少し背中が丸くなったけれどとても元気で、にこにこと上機嫌で迎えてくれた。用事とは南天の剪定である。
「よろしうたのんます」
　と、義母は少しお茶目な顔をして、ぺこりとお辞儀をした。

　京都では家の鬼門の方角（北東）に南天を植える習わしがある。敷地の関係で北西に植えるスペースのない家は裏鬼門（南西）に植えている場合が多い。
　南＝難、天＝転と読み替えて、「難を転じる」という意味が込められている。一種の「魔除け」でもあるのだ。
　秋には小さな実をたくさん房状につけて、やがてそれは真っ赤に熟す。よく料理の飾りにも使われる。
　ただ実のほとんどは鳥に食べられたり、自然に弾けて地面に埋まることが多い。アスファルトの裂け目やほんの小さな空き地にもそれが芽を出し、あっというまに伸びていく。
　義母に手招きされて行ったところもそんな「空き地」だった。このあたりは狭い路地の入り組んだ町である。四軒の家の裏側が組み合わさってできた、１メートル四方の真空地帯のような場所だった。
　たぶん鳥が種を落としていったのだろう、２メートル以上の南天が５本も生えている。

　京都の街は、完全に碁盤の目に区切られているわけではないし、「田」の字に区切られているように見える小さな町内の中でも、微妙にずれていたりする。ここも誰の土地でもないように見えて、妻の実家の土地なのだ。狭い隙間を通ってその空き地へ出た。
横並びになれない。一列縦隊で話をする。

「よう繁りましたねえ」
「腰の調子のいいときにとおもてるうちに蔓延ってしもうてねえ」
　なるべく下の方から刈ってしもうてね、というと義母は家の中に戻っていった。
　よく伸びた枝から切っていった。すると向こう側がだんだんと見えてきた。右側の家は　空き地と黒い金網で仕切っていて、空の植木鉢の置き場になっていた。
向かい側は風呂場の壁である。窓がついている。左側は屋根までトタンに覆われた壁。
　たしかにこちら側からしか剪定はできない。
　まだ赤くない、緑色の数珠のような実が房になっていくつも垂れている。中には枝だけになっているのもある。鳥に食べられたのだ。
　突然、向かい側の窓が開いた。
「いやあ、おおきにい。切ってくれはるんやねえ」
　老婆が首を出した。
「薄暗うて、陰気やなあ、てお爺さんというてましてん。ああこれで明るなるわ」
　老婆は、細い皺だらけの首をぐるりと回すと、にっこり笑って窓を閉じた。

　大きい枝をとりあえず落とし、茎を上からばちばちと切っていく。半ばぐらいからは剪定ばさみでは歯が立たず、剪定用の鋸で切っていった。
　がらがらがら、と右から音がした。積まれた植木鉢の向こうに裏口の戸があるらしい。
「あ、ごくろうさん」
　壮年の男性の声である。

「そこは野良猫がねぐらにしていて困ってましてん。これでよりつかんようになりますなあ。いやあおおきにおおきに」
　ばたんっ。

　五本の南天を大きく切り、さらに細かくしながらゴミ袋に入れていく。

「もしもし。わかります？」

　トタンの壁から声がした。
「はあ？」
　ここですねん、という声とともにトタンの壁がとんとんならされる。
「聞こえますよ。どうしはりました」
「すんまへんなあ。下のほうをみとおくれやす」
　トタン壁の一番下の所に穴が開いている。
「あのねえ、イタチがでますねん」
「はあ、イタチ？ですか」
「そうですねん。時々そこから入って、壁を駆け上がっていきよりますねん」
　つまりトタンの裏は古い土壁なのだ。土壁とトタンの隙間をイタチが駆け上がる？
　ありそうな話である。繁華街の古いビルにもでるという話をきいたことがある。
「そこを何か石でもなんでええし塞いでもらえませんやろか。」
「わかりました何か捜してみます」
「お願いします」
　静かになった。
　バラバラにした南天をすべて片づけて、その土地に立ってみた。上は真っ青な空である。　さてと、壁を塞いでやらねば。
　南天の屑を詰めたゴミ袋を持って玄関のほうへ回り、そのまま南裏の勝手口にいった。　できました、というと義母さんが、珈琲でもおのみやす、という。
　そこで、「トタンの壁穴」のことをいうと、それは可哀想やねえ、つかわんようになった漬け物石でどうやろ、という返事が帰ってきた。そやけどイタチが住んでいたらイタチには難やねえ、とも。

　その漬け物石はトタン壁をめくるようにしてできた穴を見事に塞いだ。石ががつんと壁に当たると、ちょっとして中から「こんこん」と応答があった。
「おおきに」
　と、くぐもったひとこと。

　家に戻って義母さんと珈琲を飲む。風呂の窓から聞いたこと、植木鉢の向こうから聞いたことを話した。
「よく、難を転じる、いいますけど…」
「はいはい」
「話を聴いていると、まるで南天が町中に『難』をばら撒いているみたいですね」
「あはははは」
「『我が家』ではどうもなかったんですか？」
「いえいえ、うちは、難を転じたものが手に入りましたよ」
　座蒲団の上に白黒斑の猫が丸くなって寝ていた。

（了）

舞台

　今日は節分である。
　毎年、近所の寺でおこなわれる豆撒きなど見にいくことさえなかった花村潤一が、今年は千本釈迦堂の節分会にでかけた。休日だから、ということもあるけれど、今、潤一の右手をしっかり握りしめている娘の奈々子の一言がきっかけだった。

　今朝早く、犬と散歩に出た潤一は、近所の庭師の男性に怒鳴りつけられた。犬が庭師宅の玄関前でおしっこをしたのである。いつもなら犬を急かしてそんな場所ではさせないのに、ついぼんやりしていた。指示を仰いでいる職人たちの見ている面前で大声で「非常識な」と怒鳴りつけられたのだ。
急いで帰宅し、水を入れたバケツとデッキブラシを持ってその場へ戻った。
　言い訳のしようもない。
　水を流し、ブラシでこすった。

　同じ町内でもあり、庭師とはあえばよく口をきく。だからといって玄関先を汚されれば誰だっていい気はしないだろう。
　掃除を済ますと、なぜだかわからないが、ありがとうと庭師はいった。

　潤一は、朝食を食べながら妻の信子にことの顛末を報告した。その場では、まあ、仕方ないわねえ、という言葉であっさり落ち着いたのだが、潤一の心の中には納得しきれない黒いものがくすぶっていた。
　確かに玄関前ではあるけれど、半分以上は公道にかかっていた。確かに我が家の犬がおしっこをしたけれど、自分たちよりも早い時間、他の犬たちが何匹もしている。それをあそこまで大声で非難するだうか。
　いちばん気にくわないのは、庭師の家でも犬を飼っていることだった。その犬も町内のいたる所におしっこをひっかけている。
　…何故、あんないわれ方をするんだ…
　黒い気持が外に向けての棘になっていった。
　こんどなにか言ってきたらただじゃすまさない、とまで。

　そんな時、奈々子がしゃべり始めたのだった。
「モズク君の近所のお寺の豆撒きはピーナツやねんて」
　それも殻付きだという。モズク君は奈々子の幼稚園の同級生である。

「へえおかあさん知らんかったわ」
　信子が目玉焼きからこぼれた黄身をトーストで拭き取るようにして食べながらいった。
「あなた知ってた」
「いや」
「あのね、せんぼんしゃかどう、ゆうねん」
「ああ千本釈迦堂ね」
「ななこもピーナツほしいなあ」
「あら、ななちゃんパパといってらっしゃいよ。いいでしょ」
「ああいいよ。ところで奈々子、『モズク君』て本名なのか」

「ん？モズク君はモズク君やけど」
　団地の二階のテーブルに窓から朝日が注ぎ込んでいる。奈々子の、不思議そうに父親に向けた顔が光を放っていた。
　近所の寺の節分会は午後一時過ぎだと書かれていた、と信子が買い物帰りに見たという。
　恐らく同じ頃からだろうと見当をつけて、二人は奈々子のお昼寝のあとに家を出たのだった。

　潤一だけなら自転車で行くのだが、奈々子と二人なので、バスで停留所三つだけ南へ下がり、そこから歩いていった。西陣の町中である。
　狭い通りの両側に間口の小さな家並みが続き、うっかりすると通り過ぎてしまいそうな入口から参道を少し歩くと、入口からは想像もつかないほど広い境内があらわれる。正面には大きな本堂だ。
「奈々子、豆はあそからまかはるんやんで」
「うーん」
　奈々子がのびをしている。潤一は奈々子を抱きあげた。
　節分会はもう始まっていたが、豆まきは式の最後でまだまだ先だった。その前に「木遣り」の唄と年男の紹介、そして狂言による追難式がある。
木遣りの唄が終わって周りを見渡すと境内一杯の人だった。
「奈々子、凄い人やねえ」
　奈々子は、言葉を返さずに頷き、舞台をじっとみあげている。

　社中による狂言が始まった。
　おかめさんの福々しさが鬼を改心させるという、この寺独特の追儺式だ。劇中の豆の撒き手に襲いかかる鬼たちの中には上下姿に鬼の面を着けた子供たちもいる。
奈々子が歓声を上げて舞台の子鬼を指さしていた。

　狂言が終わり、延々と年男の紹介が始まった。場内がざわつきだした頃、いよいよ豆まきである。その頃には身動きがとれないほどの人だかりになっていた。
　合図と同時に豆がまかれる。なかなか手もとまでこなかったけれど、やっとこちらまで豆が飛んできた。傍らに落ちたのを見ると、落花生である。殻付きピーナッツだ。
「奈々子、ほんまやね、殻付きや」
「うん」
　ひとたび飛んできだすと、雨あられのように飛んでくる。だからといって空中に手を伸ばしていてもなかなか掴めない。潤一は奈々子を下に降ろして、地面に落ちている落花生を拾い始めた。頭にこつこつと豆があたるのもかまわず、地面に転がる落花生に、いつか夢中になって手を伸ばしていた。
　手にとってみる。…何故、殻のついた…。
　手のひらに転がった落花生は
…「おかめ」だ…
　口元が勝手にほころんだ。ほころんだと同時に顔と心から小さな棘が抜けた気がした。
　…鬼のような顔をしていたのだろうか。
　考えてみれば朝からつまらないことをグズグズ気にし続けていたから…
 潤一は気が晴れたように感じた。
「奈々子、この豆はおかめさんなんだよ」
　返事がない。
　奈々子がいなくなっていた。

　豆撒きはそんなに長い時間かかるものではない。せいぜい１０分から１５分程度だ。舞台の上からは住職も寺の男も下がっていき、会は終わっていた。

引き潮のように人たちが帰っていく。
　人波に逆らうようにまっすぐに立って、潤一は奈々子の名前を呼んでいた。境内のどこかにはいるはずと確信はしていたけれども、不安がじわりと心を浸し始めていた。

…パパー…
　小さな声がする。あたりに目を凝らすけれど、どこにもいない。さらにパパー、と奈々子の声がする。潤一は顔を上げた。
舞台の上に奈々子がいた。傍らには袴を着たさきほど子鬼の役をしていた男の子がいる。

「奈々子、そんなとこあがっちゃダメだよ」
　潤一は舞台の下に駆け寄った。
「パパ、モズク君」
　子鬼の面を頭の上にずらした男の子がぺこりと頭を下げた。二人はしっかりと手をつないでいる。
「こんにちは」
　潤一の顔がみるみる破れて笑いが溢れだした。
「はい、こんにちは」
「鬼はもうどこにもいなくなっていた」
（了）

春宵

夜毎歩帰路

沈丁花香闇
三日月滲曇
最終講義を終えて帰る学生たちは
みな中国語で静かに語り合っていた
槐輝如銀泥
千年以上前、あなたたちの国のこの樹が
整然と街路に植えられていたんです
ここも洛中といったんですよ
声流夜沈沈

洗顔

雨上がりの朝

春よりは一回り大きい自転車で
少年が走っていく
初めてのカーディガンを着て
少女が傘を巻いている

夏よりは一つ先の辻まで歩く老犬
日陰の木槿にようやく白い花
私は頬にあてる剃刀を
まっさらにする

あとがき　２００８ー２０１２

●２００８年のあとがき

　２００６年から２００７年にかけて、メールマガジン「京都余情」とブログ「In paradism」で発表してきた作品の中から、「街」というテーマで選びました。しかしながら「街」は人がいてこそ、であって、結局人のことを書いたように思います。

　詩は、やはりその期間、婦人公論に投稿したものだけをあつめています。

　２００７年１０月に、私を常に応援してくださっていた上津裕さんがお亡くなりになりました。この本は上津さんへの感謝の気持ちをこめてつくらせていただきました。

２００８年４月

西原　正

●２０１２年のあとがき

　作品はその後もネットを中心に作り続けられ、特に「おとなのコラム」ではほぼ一年間とおして毎週連載で書かせていただきました。これらも電子書籍として発刊する予定です。

　２０１０年からの二年間は愛犬ハナの看護に生活の大半を費やしてきました。そのハナも２０１２年五山の送り火の日の朝、天国へ旅立ちました。過去の作品を電子書籍化しつつ、これからゆっくりと作品を制作していこうと思っています。

２０１２年９月

西原　正